

第4章 発掘調査の結果

第1節 基本層序

亀ヶ岡遺跡におけるこれまでの発掘調査地点は、その位置が把握できるものに限っても沢根・近江野沢の南北低湿地および亀山丘陵の広範囲に及ぶ。また、様々な調査機関により発掘調査が実施され、調査地点ごとに個別に層序が把握されてきたことから、遺跡全体に対する基本層序はこれまで組み立てられていない。

しかし、沢根低湿地においては佐藤傳蔵の分層発掘を基準とし、慶應義塾大学および青森県教育委員会の調査により層序の対比がそれぞれ検討され、鍵層となる粘土層（遺物包含層）の広がりも概ね把握されている（図4-1・4-2）。そこで、この遺物包含層を指標として、丘陵縁辺部を含めた亀山丘陵広域との層序対比が行なわれることが望ましいが、これまでに丘陵縁辺部に対する調査はあまり実施されておらず、現状では丘陵上と低湿地との層序対比が困難である。そこで、本報告では沢根低湿地と亀山丘陵それぞれについて基本層序を確認する。

沢根低湿地については、縄文時代晚期の完形土器等を包含する黒色～灰白色粘土層、その下位の土器片等を包含する泥炭層、基盤となる褐色～青色砂層の各層が佐藤傳蔵、慶應義塾大学、青森県教育委員会のいずれの調査においても確認されている。主要な遺物包含層については、粘土層下部から泥炭層にかけてとする佐藤の報告と、主に粘土層とする慶應義塾大学・青森県教育委員会の報告の間で若干の齟齬が認められるものの、泥炭層上に堆積する黒色～灰白色粘土層を、完形土器を含む縄文時代晚期遺物の主要な包含層とする見解については一致している。上記の各調査地点よりやや西側の沢根地区を調査した中谷治宇二郎の調査結果でも、「泥炭+黒土」層から完形土器が多数出土することが報告されており、粘土層と泥炭層を分層できないながらも、佐藤傳蔵・慶應義塾大学・青森県教育委員会調査地点との層序対比は可能である。

第2章第8節に触れた古環境復元を目的として実施された自然科学分析の諸結果からも、縄文時代に入ると沢根低湿地の泥炭形成が阻害されて有機質粘土層が堆積し、乾地化が進むことが判明している。この有機質粘土層が、遺物包含層である黒色～灰白色粘土層に該当し、縄文時代晚期前葉から弥生時代前期にかけて地点を変えながら遺物包含層の堆積が進んだと考えられる。

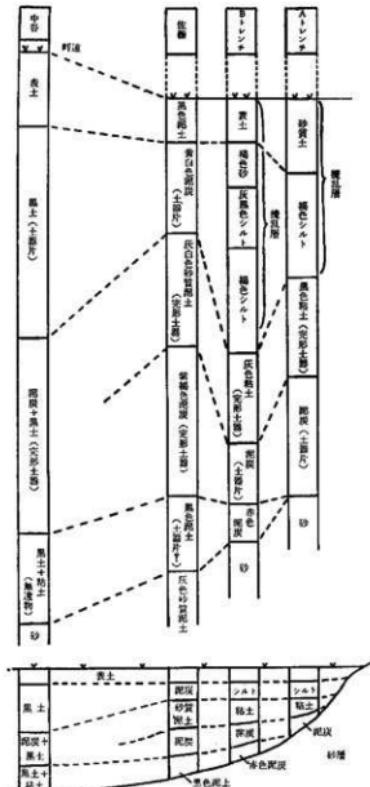
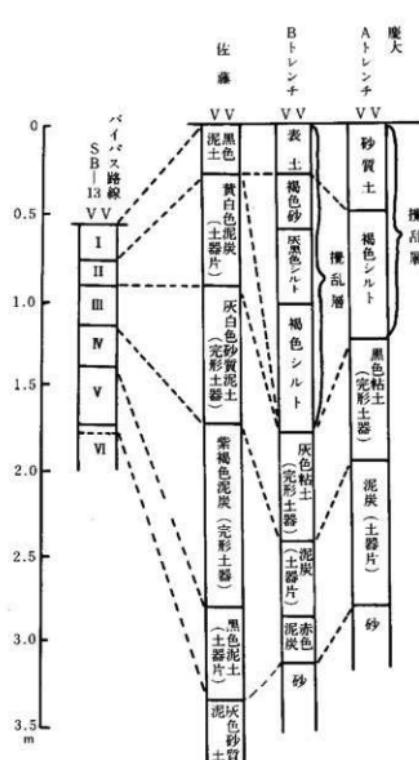


図4-1 沢根低湿地調査地点の
層序対比図（三田史学会 1959）

亀山丘陵上では青森県立郷土館とつがる市教育委員会による調査が実施されているが、調査地点により旧地形が尾根状や平坦地、あるいは小支谷と多様であり、これまで地点ごとに層序が把握されてきた。しかし、遺物包含層が確認できた地点について層序の対応関係を検討した結果、標高や旧地形は大きく変化しながらも、各地点に概ね共通する基本層序が把握された（図4-3）。

表土・搅乱層下では、地点により黒色～黒褐色土層の堆積が確認され、以下、黒褐色～暗褐色土層、暗褐色～にぶい黄褐色土層（漸移層）、地山の順に堆積が認められる。このうち黒褐色～暗褐色土層が縄文時代後期～晚期の遺物包含層であり、漸移層上面に及ぶ遺物出土も複数地点で認められる。包含層の遺物年代は地点により異なり、亀山丘陵西側（沢根83-5、83-49地点、亀山26-1地点）では後期初頭～前葉頃の遺物、丘陵東側（沢根83-51、83-32地点、県立郷土館雷電宮地区、亀山49-1・49-2、36-1地点）では晩期前葉～末葉頃の遺物が含まれる。特に、縄文時代晚期前葉～中葉頃に形成された遺物包含層は、丘陵東側で広範囲に確認されている。この他、沢根83-49地点では後期初頭～前葉頃の遺物包含層の下位に中期中葉頃の遺物包含層、亀山49-1・49-2地点では縄文時代晚期末葉の遺物包含層の上位に弥生時代前期の遺物包含層が検出されている。遺物包



慶大：昭和25年8月の発掘
佐藤伝蔵：明治29年の発掘

図4-2 沢根低湿地調査地点の層序対比図

（青森県教育委員会 1974）

含層の層厚や遺物量は地点により異なるが、旧地形が尾根あるいは平坦地における包含層はより薄く遺物量は少なく、小支谷へ堆積する包含層はより厚く遺物量も増加する傾向にある。亀山丘陵上で最も標高の高い沢根83-8地点では、縄文時代晚期の遺物包含層に対応できる堆積層は確認されたが、遺物出土量は少量であった。以上の結果から、亀山丘陵では縄文時代中期から弥生時代前期の長期間にわたり遺物包含層の形成が認められ、特に縄文時代後期初頭～前葉および晚期前葉～中葉にかけて広域に形成される遺物包含層を鍵層として地点間の層序対比が可能であることが判明した。

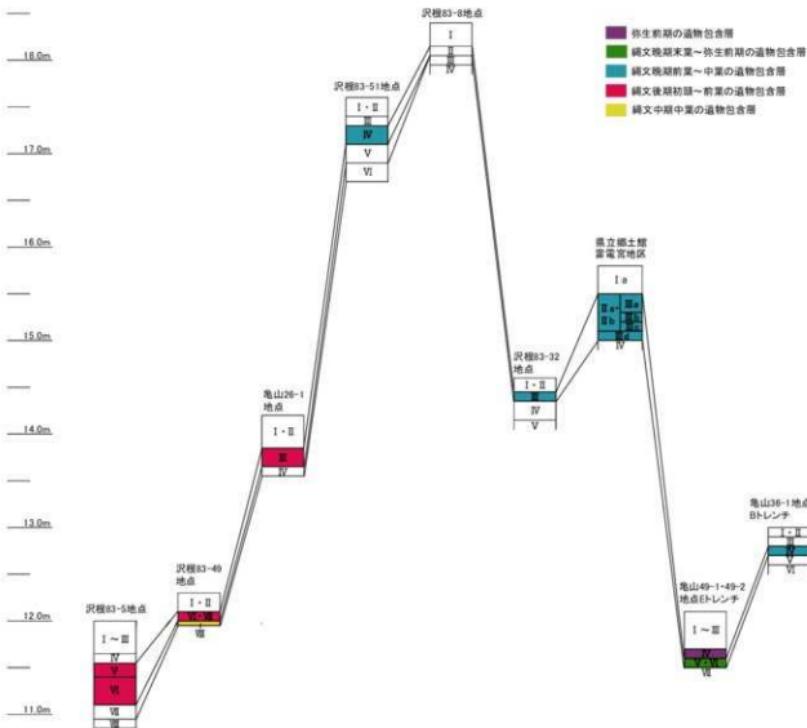
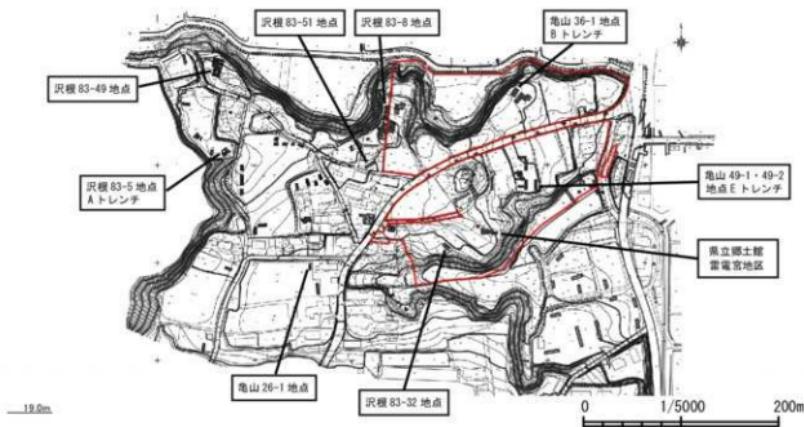


図 4-3 亀山丘陵調査地点の層序対応図

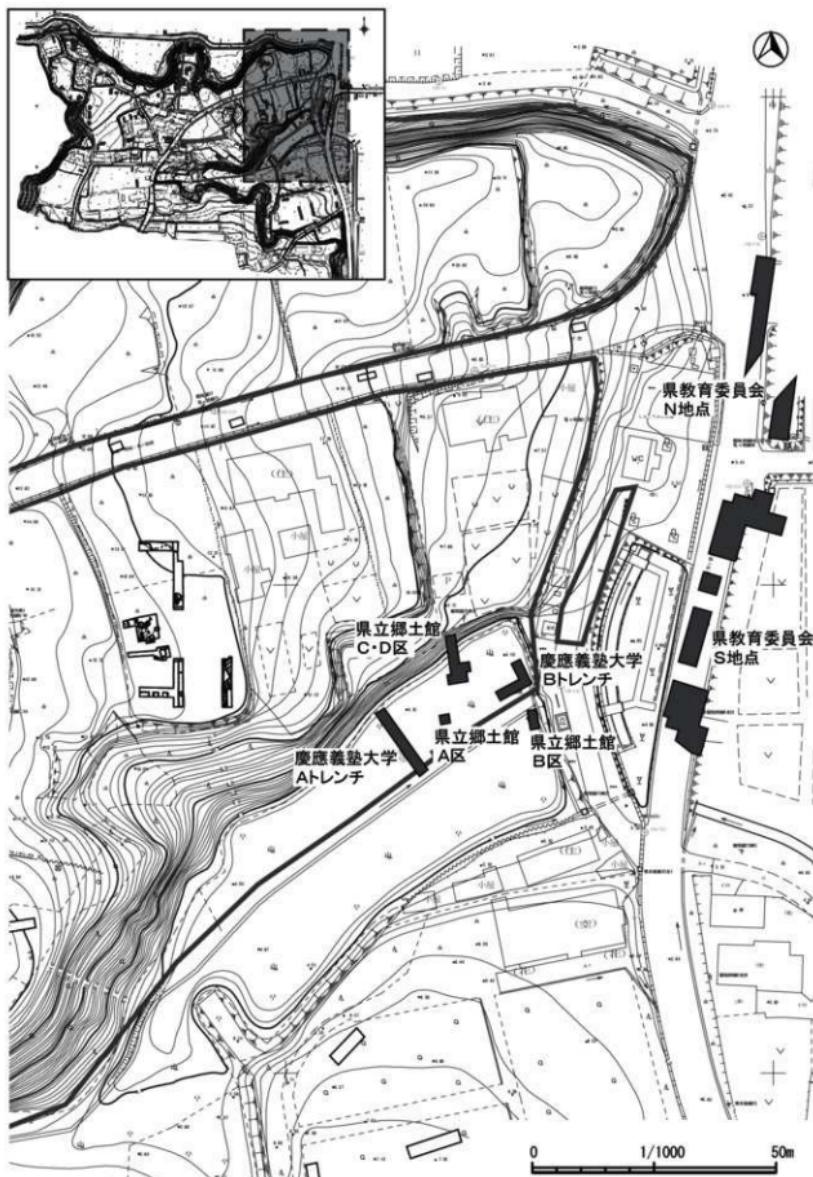


図 4-4 沢根低湿地調査区位置図

第2節 沢根低湿地の調査

沢根低湿地は、明治20年の大型遮光器土偶の出土によりその重要性がいち早く認識された地点であり、明治期以降、佐藤傳蔵、中谷治宇二郎、吉田格、慶應義塾大学、青森県立郷土館など多くの個人あるいは研究機関により発掘調査が実施してきた。その結果、沢根低湿地の広範囲に縄文時代晚期の遺物包含層が及ぶことが判明し、漆塗りの完形土器や土偶、石器、玉などの石製品、籠胎漆器、木製品、動植物遺存体といった多様な遺物がこれまでに出土している。遺物包含層から一括して出土する完形土器群に対しても多くの研究者が注目し、その形成要因に関する議論が進んだ。沢根低湿地では、慶應義塾大学、文部省科学研究費特定研究「古文化財」研究班、青森県立郷土館、弘前大学などによる古環境復元を目的とした学際的調査研究も実施され、低湿地および丘陵上の長期にわたる環境変遷が明らかにされた（第2章第8節）。

沢根低湿地には深い沼地が形成されて厚い泥炭層が堆積したのに対し、亀山丘陵東部では古岩木川や古山田川の運搬した砂層の堆積作用による谷口の閉鎖が進行し、埋没砂層上の浅い沼地が展開したとする古環境研究成果があり（市原ほか1980）、青森県教育委員会による県道バイパス建設に伴う発掘調査地点は沢根低湿地の谷口付近に相当する。そこで、県道バイパス地点の調査成果も第2節において扱う。以下、各調査機関刊行の報告書に従って調査成果を整理する。

1. 慶應義塾大学による調査(A・Bトレーニチ)

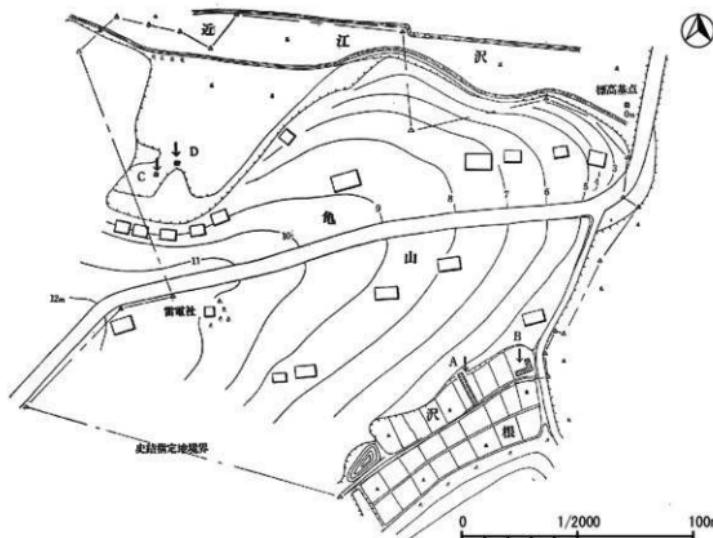


図4-5 慶應義塾大学調査区位置図（三田史学会 1959）

発掘調査の方法と経過(図4-5)

慶應義塾大学により沢根地区に設定された発掘地点は、AトレントとBトレントの2か所である。Aトレントは沢根低湿地のほぼ中央部に、亀山丘陵の裾部から低湿地にかけて長さ15m、幅2mで設定された。トレント内は2mごとに区画し、南から北へA1区～A8区と割り振られている。深さ1.5m前後で泥炭層に達し、植物遺体が多く検出されたほか、A3区～A6区で土器、石器、木製品などが出土した。しかし、A3区・A4区には西側に盗掘箇所があり、地盤が緩いうえに湧水の圧力も加わったため、トレント西壁が大幅に崩壊した。加えてA5区・A6区の西側にも至近距離に盗掘坑が存在したため、さらなる崩壊の危険性もあることから、Aトレントの発掘は完掘前に中止している。

Bトレントは東西方向の層序を明らかにするため、Aトレントから東に19mの地点に東西長さ8m、幅2mで設定された。Aトレントと同様2mごとに区画し、東より西へB1～B4区として割り振られている。さらに、B1区から北側へ直角に長さ4m、幅2mで拡張し、B5区とB6区を設定している。Bトレントからは豊富な遺物が出土し、完形土器、土偶、石器および石製品、漆器、木器、杭状木材などが出土した。これらのうち、B1区・B2区出土遺物の多くは2坪(約6.6m²)程度の小範囲からまとまって出土している。完形土器が集合をなし、相似した間隔を置いて発見される事実は、遺跡の成因を考察する上で重要な手がかりを与えるものと考えられた。

【Aトレントの発掘調査概要】

(1)層序(図4-6)

水田の表面下20cmまでが黒色の表土で、A5区以南ではこの下に第2層となる厚さ最大60cmの褐色砂層が確認された。さらに下に第3層の褐色シルト層が見られるが、A5区以北では第2層の褐色砂層は存在せず、褐色シルト層のみとなる。第4層は厚さ約80cmの黒色多腐植粘土層で、遺物包含層である。A5区北端より南では、その下に第5層の泥炭層が見られ、厚さ最大1.25mに達し若干の土器片を含んでいる。基盤となる層は青色砂層であり、A2区の中央付近では3.65mの深さで確認された。この青色砂層は北に向かって上昇し、トレント最北端で地表面に現れている。なお、丘陵の裾部では後世の耕作に伴い、傾斜面の青色砂層が切り崩され谷を埋めた痕跡が確認された。

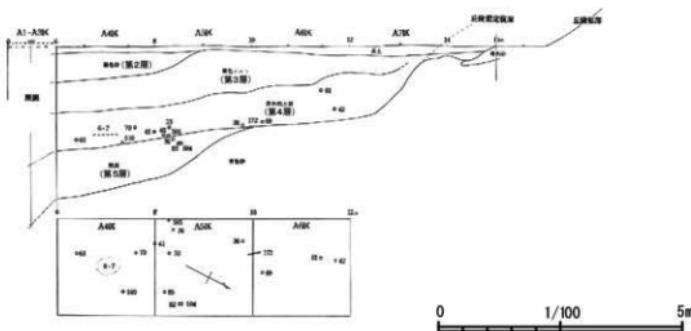


図4-6 慶應義塾大学 沢根地区Aトレント平面・断面図(三田史学会1959を一部改変)

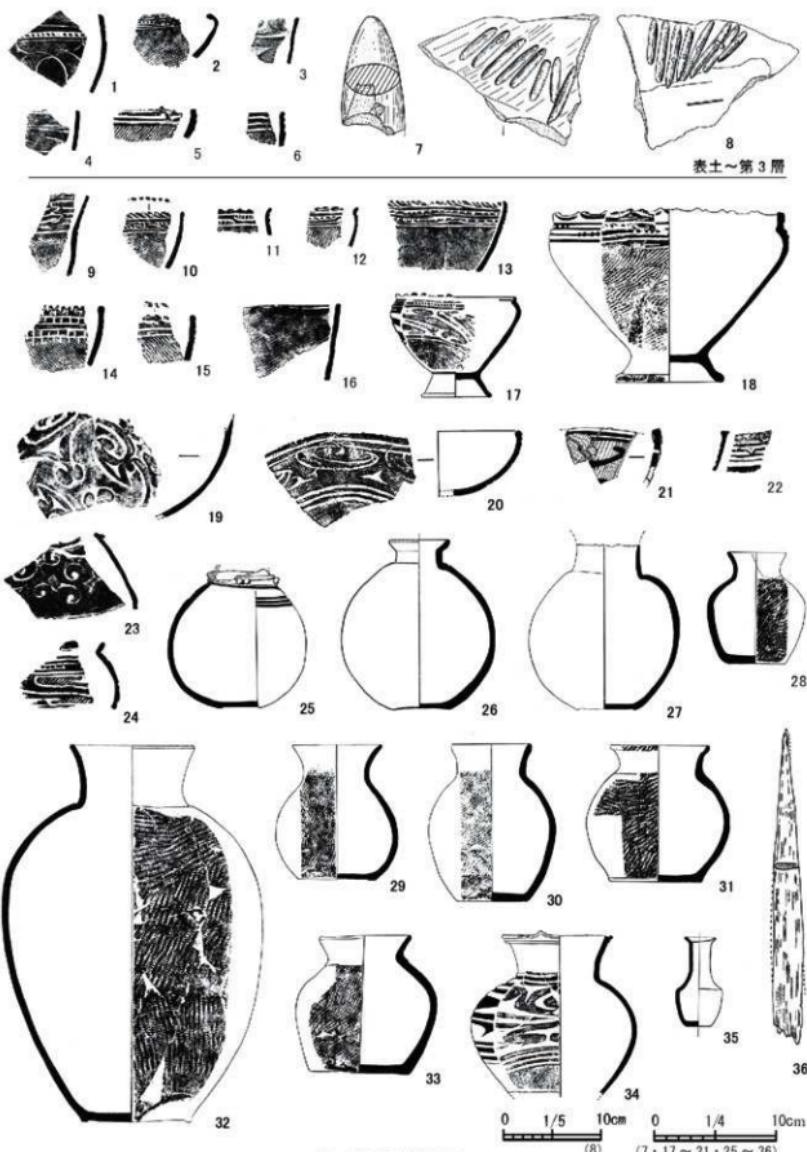


図 4-7 慶應義塾大学 沢根地区 Aトレンチ出土遺物(1)



図4-8 慶應義塾大学 沢根地区 Aトレンチ出土遺物(2)

(2) 遺物(図4-7・4-8)

Aトレンチの主要な遺物包含層は第4層だが、第5層からも土器が出土している。第3層より上からも遺物が出土しているが、調査報告によれば攪乱層と判断されている。土器の器形・文様から大洞C1～C2式期を主体とする土器群であり、Bトレンチでほとんど見られない大洞BC式期の羊齒状文を有する破片も出土している。このことから、大洞BC～C2式期の包含層であると推定され、Bトレンチ出土遺物より年代的に遡ることが報告書で指摘されている。

土器

第4層からは壺を主体として深鉢・鉢・台付鉢・注口土器などが出土した。壺は完形あるいはほぼ完形品のみでも13点出土している(25～35・38・39)。報告書では、器形からa: 脊部の球状を呈するもの、b: 肩部の張ったもの、c: 背の高いもの、d: b類に似て装飾を附したもの、の4類に分類され、a・b類が主体となる。25は頭部と脊部の境に2条の隆帯がめぐり、その上にB突起が4単位展開する。34は口縁にA突起を有し、脊部上半に連繋入組文の施文された聖山I式の壺である。他の壺は、無文ないし脊部に繩文のみ施される。9は口縁部が外反し、入組沈線文が施文される深鉢、10～12は口縁部に羊齒状文が施文される鉢ないし深鉢である。13・14は口縁部の平行沈線間に刺突列や刻み目がめぐる。17・18は台付浅鉢で、17には口頭部に沈線間の刻み目を有し、脊部に磨消繩文手法による大腿骨文が施される。皿は完形品が1点と、その他破片が出土している。20は浅鉢に近い皿で、脊部にはC字文を基調として三叉文が充填された雲形文が展開する。19は注口土器の脊部破片だが、浮文化された雲形文が展開する。漆塗りの精製土器は壺と皿に確認される。21は皿の破片で、紐状の織維と接着剤で接着を行ったうえで丹漆を施している。23は口頭部に渦巻文の施文された注口土器である。

第5層からは深鉢・壺などが出土した。37は深鉢で、頭が丸みを帯びて太く、口径が脊部径よりも小さい。口縁に刻みを有し、頭部に4条の平行沈線がめぐる。38は壺で、口縁に山形突起を有し、頭部と肩部の境に1条の隆帯がめぐる。隆帯上には横位の溝が一定間隔に施される。

石器

第3層から磨製石斧や砥石が出土した。8は玉類の製作に用いられたと推定される有溝砥石であり、裏表ともに溝状の研磨痕が同一方向に多数残される。

木製品

第4層から箆状木器が出土した。36は破損が著しいが板状品で、一端を削り先端を尖らせている。材質はスギである。この他に第4層からは赤漆塗の櫛1点も出土した。径3.5cmほどの不整菱形を呈する断片である。

【Bトレーニングの発掘調査概要】

(1) 層序(図4-9)

地表面から35cmまでが黒色の表土で、次に厚さ25~80cmの第2層となる褐色砂質土層が見られる。表土層と褐色砂質土層の間には、攪乱と推定されるレンズ状の黒色砂質土層が確認された。第3層は厚さ最大40cmの灰色粘土層であるが、B3区中央以西では消滅している。第4層は厚さ40~80cmの褐色シルト層であり、ここまでは遺跡廃絶後の堆積と報告されている。その下からは灰色を帯びた粘土層(第5層)が現れ、完形土器群を含む遺物包含層である。トレーニングの中央で最も堆積が薄く、東端では厚くなり厚さ95cmを測った。さらに掘り下げるとき層厚約40cmの腐植が進んだ泥炭層が確認されるが、遺物はほとんど出土しない。この下からは「赤褐色を呈し、水分の多いドロドロした」特徴的な泥炭(赤褐色泥炭層)が確認され、遺物は皆無であった。基盤となる青色砂層には深さ2.5m前後で達している。

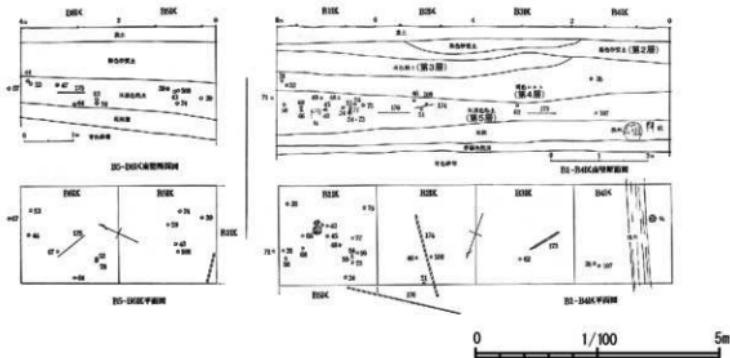


図4-9 慶應義塾大学 沢根地区 Bトレーニング平面・断面図 (三田史学会 1959を一部改変)

(2) 遺物(図4-10~4-15)

Bトレーニングでは主要包含層の厚さが50~70cmと比較的薄いが、Aトレーニングと比較して格段に多くの遺物が出土している。大洞C1~C2式期の土器が多数を占めるが、大洞A式の破片も相当数確認される点から、Aトレーニングよりもやや新しい時期に形成された遺物包含層であると推定されている。

土器

調査時の所見から、表土から第4層までは遺跡廃絶後の堆積層であると判断されたものの、深鉢・鉢・台付鉢・浅鉢・壺等の破片資料が多数出土した。深鉢は、胴部に膨らみをもち口縁部が内湾する。2~5は口縁部に2ないし3条の平行沈線をめぐらせ、胴部に縦走繩文が施される。9~10は口縁から胴部にかけて縦位の条痕が施される。鉢には工字文(16~19)・入組工字文(15)・変形工字文(25~26)・匹字文(21)・結節沈線(24)等が施文される。13は胴部に連繁入組文の施文された聖山I式の鉢である。壺は頸部に無文帶を有し、肩部に工字文が施文される(33)。

第4層からは鉢・壺が出土した。51は口縁部に3条の平行沈線をめぐらせ、その下位に2個1対の粘土粒が貼付される。52は肩部と胴部の境が隆起で区画され、その上に粘土粒が貼付される。肩部に流水工字文、胴部に矢羽状文が施文される。53~55は肩の張る無文ないし繩文のみの壺である。

第5層からは深鉢・鉢・台付鉢・浅鉢・壺・注口土器が出土した。深鉢は第4層以上から出土した

もの同様、口縁部に平行沈線をめぐらせ、胴部は縱走縞文や縦位の条痕が施される。鉢は完形品および破片資料が多数出土している。器形から a：底部から口縁へゆるい曲線を描いて広がるもの、b：肩部が強く張り、一度内屈してから頸部が再び外方へ開くもの、c：b類のように肩部の屈曲は見られないが、口縁がわずかに外方へ反るもの、d：特異な形態を有するものの 4 類に報告書中で分類され、a・b 類が主体となる。68・69 は口頸部に平行沈線と刻み目が施される。74～76 は口縁に A 突起ないし B 突起を有し、口頸部に平行沈線や結節沈線が施される。78 は胴部に連繋入組文の施文された聖山 I 式の鉢、79・88 は胴部に横位連続工字文の施文された聖山 II 式の鉢である。81～84 は胴部に入り組んだ向き合う C 字文ないし満巻文が施文され、横位に展開し多段化する。台付土器はいずれも鉢 b 類に台を付した器形を有する。浅鉢と皿は精製土器が多い。報告書では、a：浅鉢に近く、丸底か小さく凹んだ底部を持ち、胴が強く外湾しつつ口縁に至るもの、b：底の大きい浅鉢形で、側縁が底から口縁へと直線的に開くもの、c：背の低い皿で、底径が大きく b 類の高さを減じたもの、の 3 類に分類されている。96・99 は胴部に C 字文を基調として三叉文が充填され、雲形文が展開する。壺は完形品で 17 点が出土している（106～122）。器形から a：扁球形の胴部を持つもの、b：底部と口頸部が大きく、幅の割に高さが高いもの、c：胴上部の強く張るもの、d：腹部が著しく横に張り出し、直立する短い口部を附したもの、e：朝顔形に開いた大きな口頸部を持ち、胴上部から急にすぼまるもの、f：袖珍土器、g：口径が大きく瓣形のもの、の 7 類に分類され、b・c 類が主体となると報告されている。106～108 は口縁に B 突起を有し、平行沈線で区画された胴部上半に C 字文と三叉文が施文されて雲形文が展開する。116～119 は口縁に大ぶりの A 突起とそれに付随する B 突起が施される。120 は小型の壺で、胴部上半に C 字文が施され横位に展開する。122 は大型の壺で肩が強く張る。123 は注口土器の口頸部破片である。この他、彩色が施された土器も多く出土しており、丹漆塗、黒漆塗、褐色漆塗、アスファルトを塗ったもの、黒漆と赤漆で文様を施したもののが確認されている。

土製品

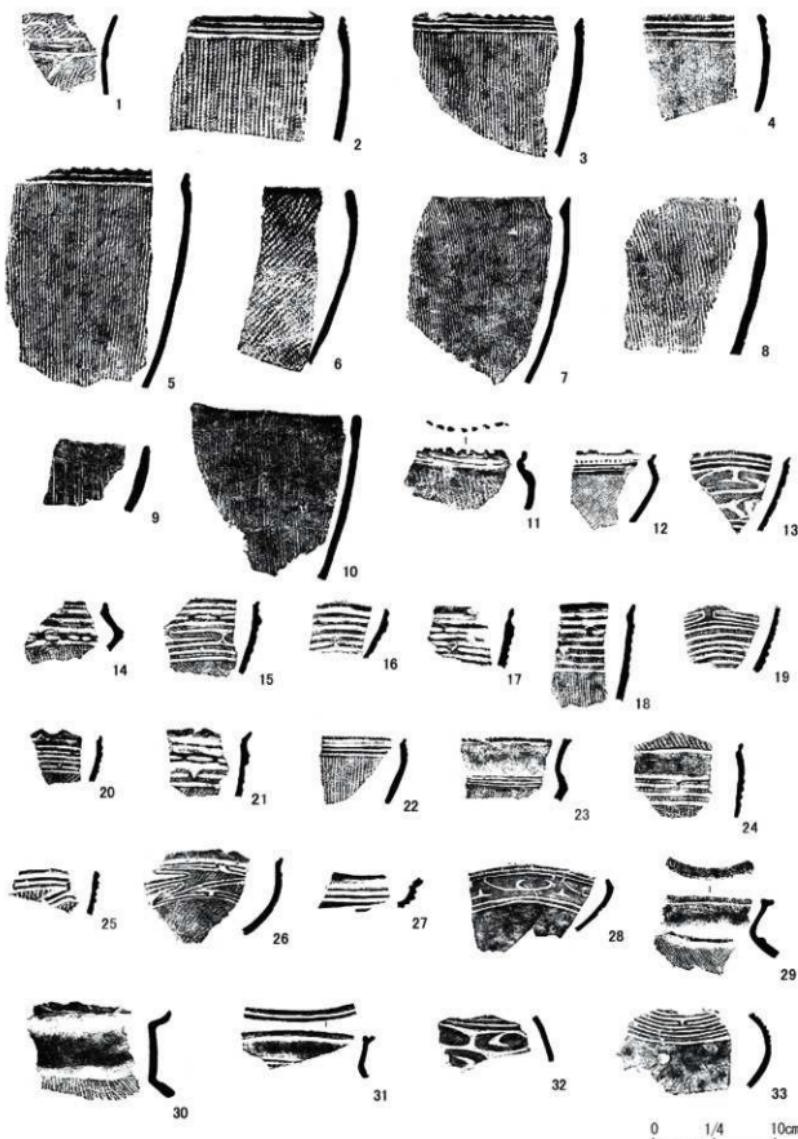
土偶は 6 点出土し、うち主要包含層である第 5 層からの出土は 2 点のみである（124・125）。完形のものではなく、いずれも胴部や手足の部分破片である。表土付近から出土した 39 は胴部と左手が残存し、首からは沈線と蘇手文が正裏面にそれぞれ垂下し、そこから左右対称の弧線文が施される。耳飾は第 5 層から 1 点出土した（126）。片側が小さく作られた栓状耳飾で、中央に孔を持つ。全面に丹漆を塗っている。円板状土製品も 4 層までの層から 1 点出土しており、大形粗製土器の破片を打ち欠いて作られている（41）。

石器

石器類は報告書中の遺物観察表から判断する限り、そのほとんどは沢根地区 B トレンチから出土している。発掘面積に比して多量とはいがたく、そのうえ完形土器のように一定の場所に密集して出土する傾向は示していない。石鏃は完形品が比較的少なく、全て有茎鏃である。（42・43・127～134）。利用石材は流紋岩とチャートが多く、メノウも 1 点確認される。黒曜石は 1 点も出土していない。石範は瓣形を呈し、刃縁は弧状あるいは直線状となる（44～47・135・136）。石匙は縦型と横型が確認されている（48・49・137・138）。139 はスクレイバーで、剥片の縁辺に簡単な二次加工を加えて刃部を作り出している。50 は磨製石斧であり、刃部側を欠損する。142 は石剣であり、両端部とも欠損する。140・141 は敲石である。141 は端部と側縁部の敲打痕とともに平坦部に凹孔がある。この他、石錘・磨石・砥石・一部を研磨した加工礫等が出土している。

石製品

143・144 は緑色珪質凝灰岩製の玉類である。143 は未完成品で、両面からの穿孔が中途段階にある。その他、B2・B3 区では玉の原料となる緑色珪質凝灰岩の小原石が一括で計 24 点出土した。



表土～第4層

※16、17、26～33は縮尺不明

図4-10 慶應義塾大学 沢根地区Bトレニチ出土遺物(1)

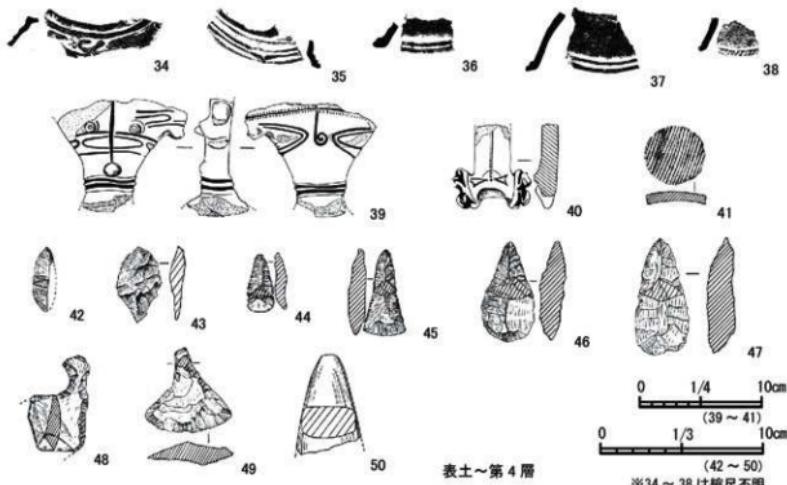


図4-11 慶應義塾大学 沢根地区Bトレンチ出土遺物(2)

骨角器

骨角器は、骨鉛、箆状具、鹿角製異形品、鳥骨製管状品が各1点出土している。145は骨鉛である。細身の鋭利な作りであり、逆刺が斜め下方に突出する。147の鳥骨製管状品は鳥類の小形の管状骨の両端を裁断したもので、未完成と推定されている。この他、B5・B6区では箆状具が出土しており、大型鳥類の管状骨を用いよく研磨されている(三田史学会1959 第29図113)。

木製品

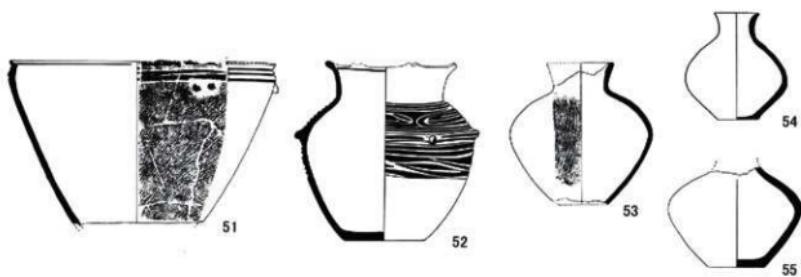
150の杭状品は小形で扁平な杭状を呈し、未完成と推定されている。151の棒状品は不整矩形で、用途は不明である。152の異形棒状品は残存1m程で、裏表とも丹念に削ったうえ一端を細く削り尖らせている。153の握り付棒状品は残存1.3m程で、握りのような部分を削り出し、先端に向かって厚みを減じている。154の槍状品は残存1.5m程で、一端が太く先端が細く削られている。材質は150がヒノキ、151～154がヒノキアスナロである。その他、加工の有無不明なものが出土している。

漆器

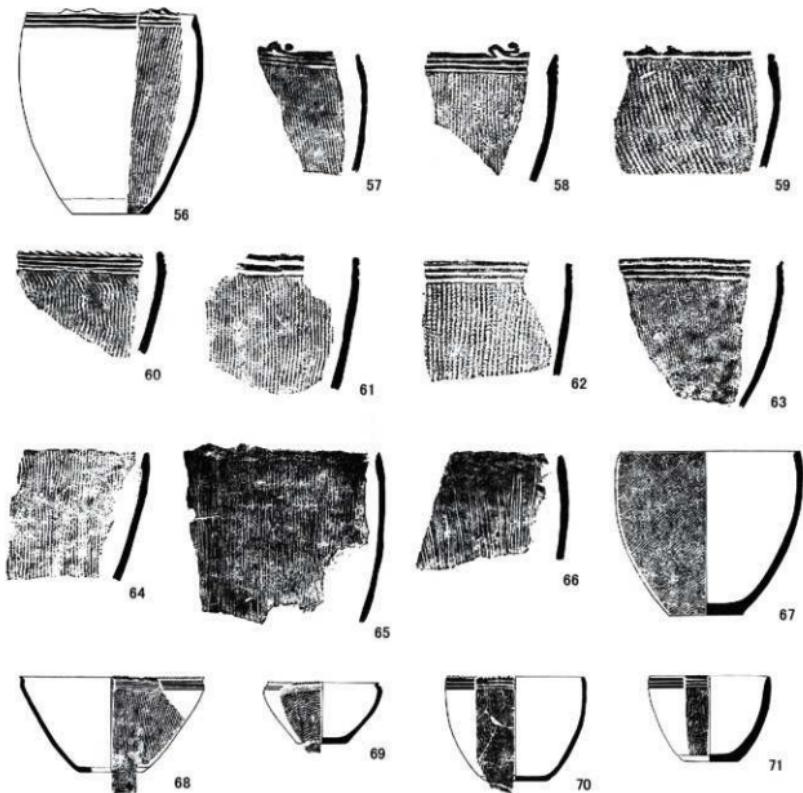
籠胎塗器はBトレンチから2点出土している。148は鉢形で、正方形の底部に4つの突起を有する。細い材で籠を作り、黒色塗料の上に赤色塗料を塗って仕上げている。149は胴部に膨らみを持つ浅鉢形で、内外面に赤色塗料が塗られている。第5層からは赤色塗の櫛1点も出土した。長さ3.5cm、幅1cmほどの偏平な長方形を呈し、下面には歯を入れた小孔が並ぶ。その他、第5層からは棒状品に塗布されていたと推定される管状漆被膜残欠(三田史学会1959 図版第5の10)と、木器に塗布されていたと推定される漆被膜残欠が1点ずつ出土している。

鉱物その他

第5層から、径3～4cmの円形の黒曜石原石が4～5個一括して発見された。表面は白く風化しているが良質のものである。アスファルトは、B4区第5層から出土した1点の土器底部、および他の土器破片の内面に、土器内に盛られた半流動状に乾固した状態で残されている。この他、土器・漆器などの赤色塗料の原料である酸化鉄の小塊が多数採集された。

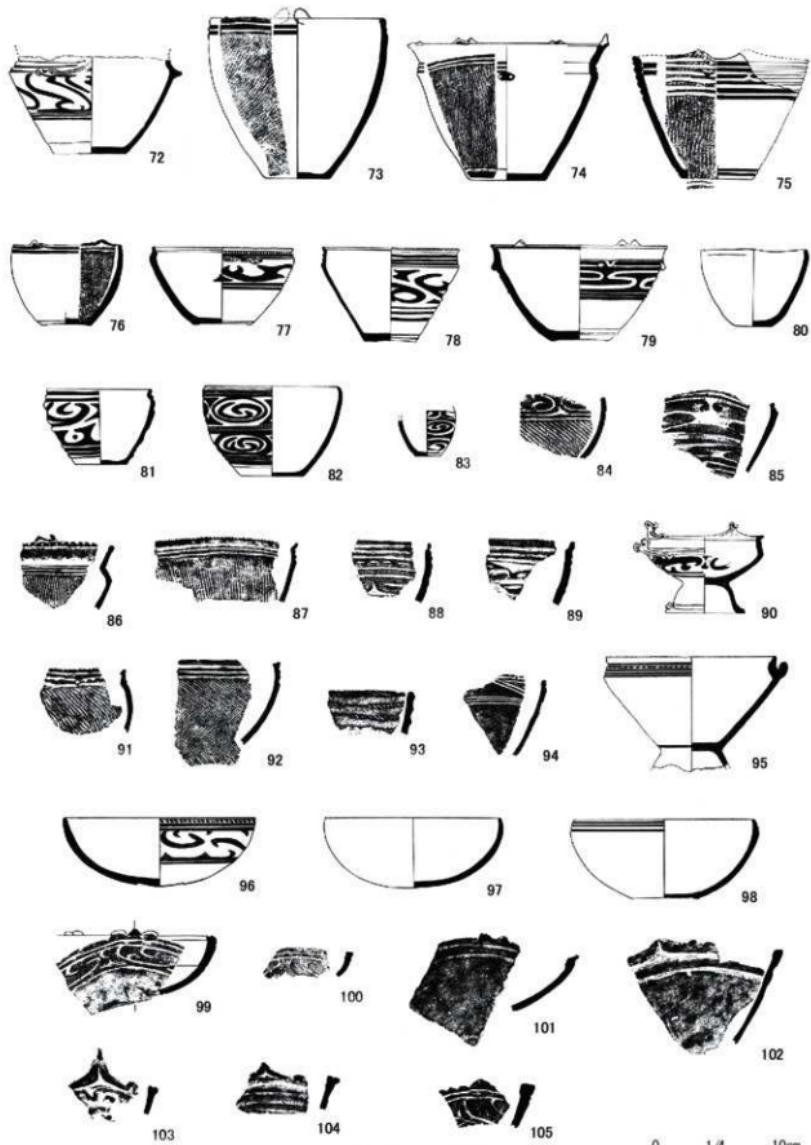


第4層（褐色シルト層）



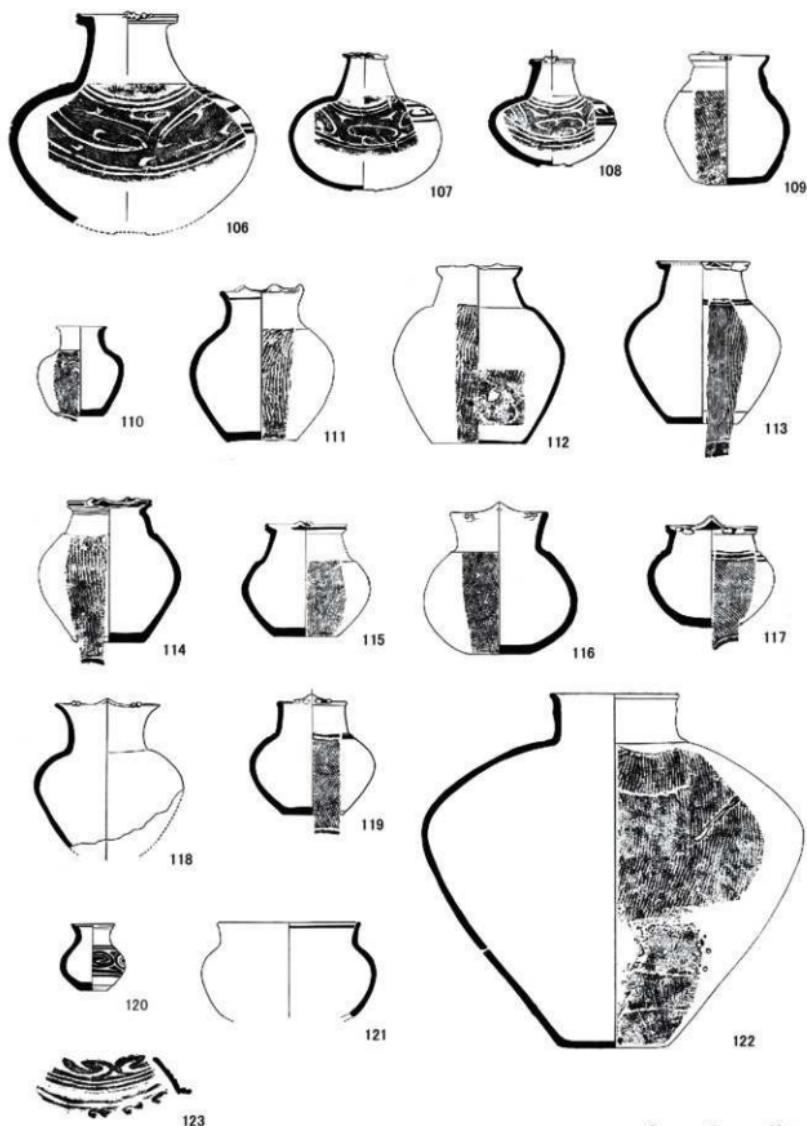
第5層（灰黒色粘土）

図4-12 慶應義塾大学 沢根地区Bトレンチ出土遺物(3)



第5層（灰黒色粘土）

図4-13 慶應義塾大学 沢根地区Bトレーンチ出土遺物(4)



第5層（灰黑色粘土）

0 1/4 10cm

図4-14 慶應義塾大学 沢根地区Bトレーンチ出土遺物(5)

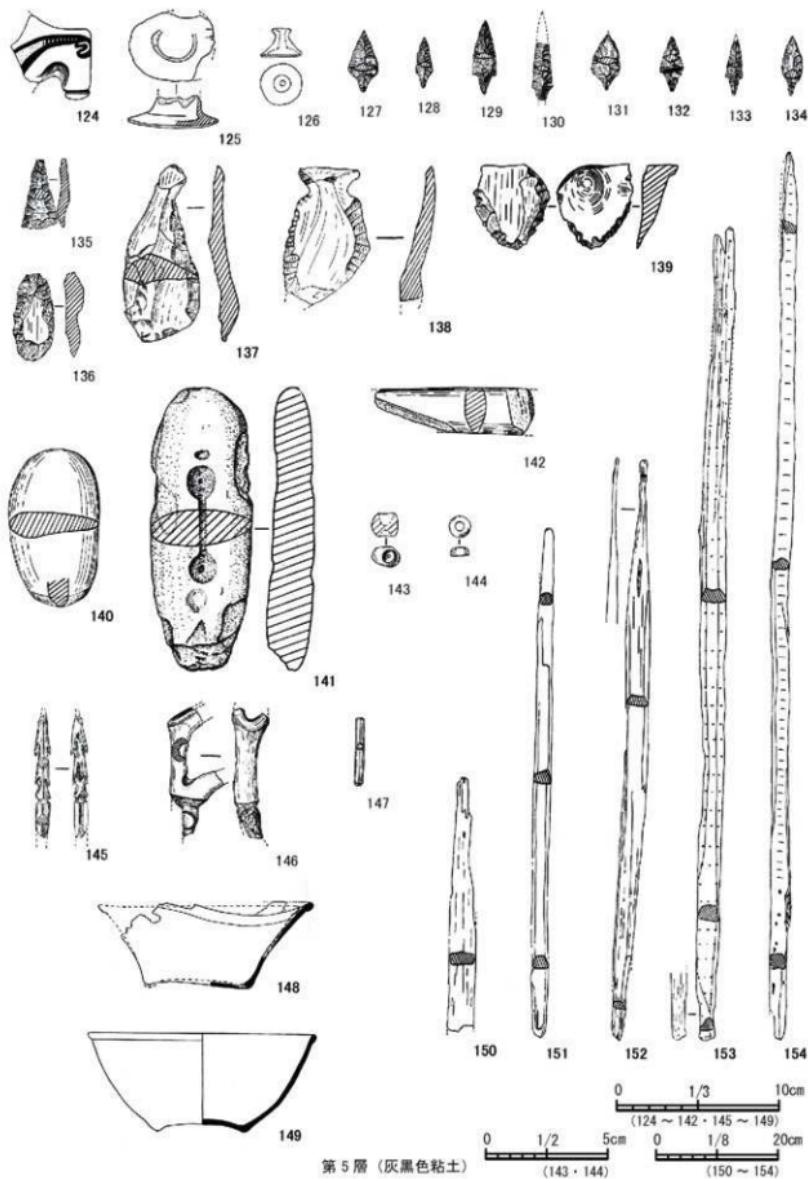


図 4-15 慶應義塾大学 沢根地区 B トレンチ出土遺物(6)

2. 青森県立郷土館による調査(沢根A～D区)

青森県立郷土館による沢根地区的調査は昭和55～57年度の3か年計画で実施された。第1年次にはA区とB区、第2年次にはB区の残りの部分とC区、第3年次にはD区の発掘が行われている(図4-16)。

A区は沢根低湿地のほぼ中央部に設定され、2m四方の1グリッドで4m²である。B区は、A区東側の史跡指定地に隣接する畑地に2×4mで設定された8m²のグリッドで、北側をB1区、南側をB2区としている。このA区とB区は、昭和25年の慶應義塾大学による発掘調査地点と重複することを避けて設定されている。C区はA区・B区の中間北寄りに、土層を把握する目的で丘陵部から低湿地にかけて設定された。2×6mのグリッドで、東側からC1～C3区として割り振られたが、C1区とC3区はそれぞれ半分の2m²のみ掘削している。D区はC区の北側に隣接し、C区と同様に丘陵部から低湿地に至る土層堆積を把握する目的で設定された。2×8mのグリッドで北からD1～D4区、および西側に並行して同規模のD5～D8区を設定したが、実際に掘削したのはD4～D8区の20m²であった。



図4-16 青森県立郷土館 沢根地区A～D区位置図(青森県立郷土館1984を一部改変)

【A 区の発掘調査概要】

(1) 層序(図 4-17)

A 区は約 2 m の深さまで発掘が行われた。砂質の土層が主体であったため、降雨と湧水によって崩れやすく、作業上危険であることから完掘はしていない。I 層は表土で、草の根が多い。II 層は暗褐色土で、この層までは攪乱を受けている。III 層は灰褐色、IV 層は暗灰褐色の土層で、どちらも砂質が強い。III 層の方が砂の粒子が粗く、酸化の度合いが強い。IV 層は下位になるとより粘性を帯びる。V 層は III・IV 層と色調は変わらないが、粘質が強く炭化物を混入する。VI 層は砂を多く含み、粒子によって a・b に区分できる。VIA 層は緑灰褐色土で草の根を含んでいる。VIB 層は淡緑灰褐色土で a 層より砂質が強い。

VII 層以下は粘土質の土層で、下位ほど粘性が強まる。VII 層は上層の砂質土の影響を受けて砂が混入しており、a・b に区分されている。VIIA 層は暗褐色粘質土で、粒子の細かい土質炭化物が少量混入している。VIB 層は灰褐色粘質土で堆積が厚く、VIIA 層より砂質が強い炭化物が少量混入している。VIII 層は黒褐色粘質土で、炭化物を混入する。IX 層は暗黒褐色粘質土で、炭化物および植物性遺体(クルミ)が出土した。X 層は黒色粘質土で、粒子の細かい粘土状を呈し下位ほど粘質が強い。XI 層は灰色砂層で非常に固い。掘削は X 層まで行われ、この XI 層は上面の確認のみであった。

A 区の土層は砂層が多く、ほとんどの土層でシルト砂が混入していた。特に、III・IV 層では砂質土が 50 cm 近く堆積していた。遺物の出土量および土中の花粉検出量が非常に少ない点からも、A 区は沢根の湧水が運んだ再堆土層と推定されている。

(2) 遺物(図 4-18)

土器

他の調査区と比較すると土器は風化しており、細片が多い。出土土器は大洞 C1・C2 式期が主体となっている。

I 層と II 層からはほとんど遺物が出土せず、表土には現代陶器が混入していた。III 層も出土遺物は少ないが、IV 層からは大洞 C2 式期の鉢・台付鉢の粗製土器が、V 層からは大洞 C1 式期の粗製土器が出土している。VI 層からの出土量は多く、大洞 C1・C2 式期の鉢・台付鉢、および口縁部に肥厚した突起を付した土器が確認された。VII 層および VIII 層からは大洞 C1 式期と推定される粗製土器の他、大洞 BC 式あるいは C1 式期と推定される精製土器の細片が各層から少量出土している。また、IX 層からも粗製土器片が出土しているが、型式は不明である。

石器

石鏸 1 点、石槍 1 点、スクレイパー 1 点の計 3 点が出土した。石鏸は無茎で先端部を欠損する。石槍は小型のもので石鏸に近い。スクレイパーは周縁部に刃部が作り出される(青森県立郷土館 1984 図 7、PL12 上段)。

石製品

I・IV・VI～VIII 層から玉の未成品とその原石が計 15 点出土しており、石材はいずれも緑色珪質凝灰岩である。未成品には、穿孔途中で破損したもの、原石の縁辺を擦って平坦面を作り出しているも

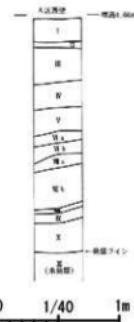


図 4-17 青森県立郷土館
沢根 A 区 土層断面図
(青森県立郷土館 1984)

のがある（青森県立郷土館 1984 PL12 中段）。

動物遺存体

VII～IX層からは、シカ・イノシシといった陸獣骨の他、ヤマトシジミやスマガイの貝殻片が出土している（青森県立郷土館 1984 第 10 章 X）。

その他遺物

寛永通宝の古錢が 1 点の他、蝶ネクタイ型の木製品が 1 点出土している。寛永通宝と同じ層位から出土しており、江戸時代のものと推定されるが用途は不明である（青森県立郷土館 1984 PL12 下段）。

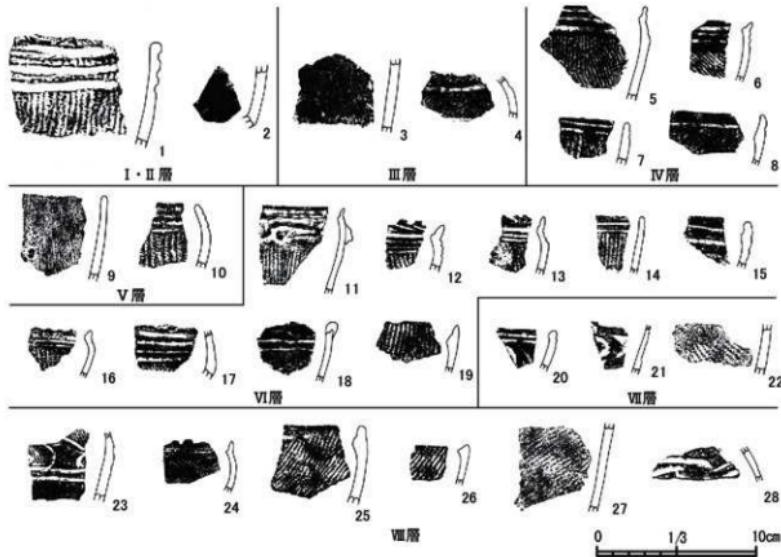


図 4-18 青森県立郷土館 沢根 A 区出土遺物

【B 区の発掘調査概要】

(1) 層序(図 4-19)

B 区では第 1 次調査で B1 区 Va 層、B2 区 VII 層（一部 VIII 層）まで掘削し、第 2 次調査ではそれぞれさらに掘り下げる、約 3 m の深さまで発掘を行っている。

地表面の埋土の下には砂質シルトの I 層があり、a・b に区分される。Ia 層はオリーブ黒色、Ib 層は黒褐色である。II 層は砂質の黒色粘土質で、色調で上・下に区分される。I 層と II 層の間には、薄い間層が計 6 層（間 b～間 g）存在する。これらの間層は泥炭で、植物遺体を多く含む。III 層は淡い緑色を呈する火山灰層である。IV～VII 層は概ね灰色で砂を含む粘土層で、遺物包含層となっている。VIII 層は粘土層でほとんど遺物を含まず、a・b・c に区分される。IX 層は暗灰黄色の粘土質砂層で遺物

が数点出土しており、X層は灰色粘土層でクルミが出土した。

XI層はオリーブ黒色の砂質粘土層で、以下は粘質土層、砂層、泥炭層の互層となっている。III～VI層は泥炭層であり、遺物は出土しない。特にIII・IV・V・VI層は植物堆積層とでもいうべきもので、下位ほど土より草木が多くなる。なお、XI層はオリーブ黒色、VII層は黒褐色、VIII層はオリーブ黄色のそれぞれ粘土層である。VII層は灰オリーブ色のシルト質細粒砂層で、IX層は黒色細粒砂層で植物遺体を多量に含む。

最下層のVII層は中粒砂層で、スコップやハンドボーリングでは容易に突き刺せない程の硬さであった。ハンドボーリングの結果から、より下位にも泥炭層が存在することが確認されているが、このVII層を基盤層として捉え、掘削を止めている。

(2) 遺物(図4-21～4-23)

土器

I層は搅乱層のため細片が多い。大洞A式期を主体とし、鉢などが出土する。大洞C1・C2・A'式期もみられる。II層も細片が多いが、大洞C1式期の鉢、大洞A式期の壺が出土する。III層は大洞A式期が主体を占め、厚手の大型把手や鉢が出土する。また、大洞C2式期の土器や条痕文土器も複数出土する他、土師器や陶器も混入している。

IV層からは比較的多くの土器片が出土しており、大洞A式期から弥生時代中期に至る土器が確認されている。特に、B2区では大洞A式期が主体である。口縁部に工字文を施し、平行沈線上に粘土粒を貼付した大洞A式期の鉢(16)、変形工字文が施された大洞A'式期の浅鉢(23～25)、地文である縄文の上に平行沈線と鋸歯文が施された田舎館式土器の胴部破片(27・28)、彫りの深い沈線文を施し、内外面ともよく研磨された砂沢式土器などがある。口縁部に平行沈線や工字文などが施される完形の深鉢ないし鉢も3点出土しており、いずれも大洞A式期である(8～10)。

V層は大洞A式期を主体とし、工字文が施された浅鉢や鉢の他、条痕文土器が出土している。

VI層からは、B2区で完形および完形に復元可能な土器が2点出土している。36は粗製の深鉢で、口縁部に平行沈線、胴部に縦線の条痕文が施されている。47は口縁部に変形工字文が施された大洞A式期の四脚付土器である。浅鉢の底部に4個の脚が付いており、被熱の痕跡がある。46は団上復元が可能な資料で、口縁にA突起を有する台付鉢である。土器破片には、彫りの深い変形工字文が施された大洞A'式期の鉢や、大洞A式期の鉢の他、結節沈線や条痕文の施された粗製土器などがある。大洞C2式期の土器も出土しており、磨消縄文手法による入組文を施した精製の壺や、口頸部に2個1対の小突起が付いた粗製の鉢などが確認された。

VII層は、大洞C1・A式期を主体としている。63は口縁に結節沈線と工字文の施文された大洞A式期の鉢、70・71は大洞A式期の無文の壺である。70には朱が全面に塗られる。破片は精製・粗製土

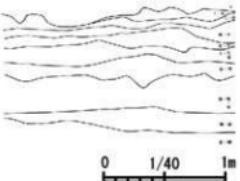


図4-19 青森県立郷土館
沢根B1区土層断面図
(青森県立郷土館 1984)

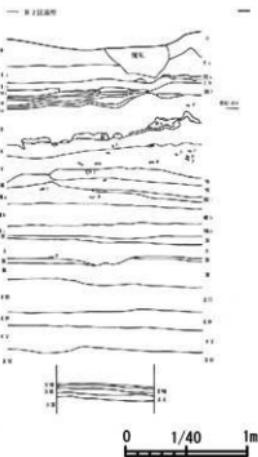


図4-20 青森県立郷土館
沢根B2区土層断面図
(青森県立郷土館 1984)

器ともに出土し、工字文や平行沈線が施されている。大洞 C1 式期の土器は、羊齒状文の名残を示す刻み目帯や平行沈線が口縁部をめぐるものや、磨消しによる無文帶を有するものが出土している。

VII層からは鉢・壺の破片等が出土している。

土製品

土偶と土版がVI・VII層から出土した。48は上半身と脚部を欠損する土偶である。全体に縄文が施され、腰部に2条の平行沈線、脚部付け根にも沈線がめぐる。49は黒色を呈する土版で、残存部は4分の1程度である。沈線を重層的に配した「コ」字状文が裏表に施文される。72は土偶で、頭部・右腕部・脚部を欠損する。肩部および腕部に瘤状突起を有する。胸から腹部にかけて細かな刺突が施され、その後正裏面にはV字状沈線文と懸垂文が施文される。首の破損部にはアスファルトの付着が認められる。この他、I層から土偶の上半身と下半身が各1点出土した(青森県立郷土館 1984 図24)。

石器

石器類は合計で29点が出土している。石鏃はIII～VI層の各層から出土している(3・29・35・50～54)。破損しているものが多いが、全て有茎石鏃である。一部の茎部にはアスファルトが付着している。7はIIIb層出土の磨石であり、扁平な自然石の側辺に磨耗痕が認められる。55・56はVI層出土の石槍であり、いずれも破損品である。57はつまみ部を作り出した石錐であり、VI層出土。58・59はVI層出土の石匙である。60と73はそれぞれVI・VII層出土の石鎧であり、73は撥形に近い形状を呈する。61はスクレイバーであり、剥片の側縁を軽くノッチ状に加工して刃部を作り出している。62はVI層出土の磨製石斧である。刃部は両刃を呈するが、片面の刃部が磨滅により銳角をなす。74はVII層出土の打製石斧であり、刃部や両側部の整形が安定していないため、スクレイバーの可能性もある。

この他、黒曜石の原石および剥片が多数出土した(青森県立郷土館 1984 PL19 下)。

石製品

珪質凝灰岩製の玉類は、完成品が1点、未完成品が51点、原石が120点出土した。VI層から80点以上出土しており、その上下の層では15～20点ほどに減少する。完成品は滑車型を呈し、未完成の観察から、穿孔方法は両面穿孔である。原石はほとんどが緑色珪質凝灰岩であるが、安山岩の小礫も2点存在する(青森県立郷土館 1984 PL18)。また、玉製作用の小型の石錐も確認されており、未完成品を合わせて計51点が出土している。出土層位は、玉類と同じくVI層が最多となる。材質はメノウが多く、他にチャートや鉄石英などがある(前掲PL19上)。

動物遺存体

III・IV・VI層からイノシシ、ウグイ類、タイ類、鳥骨が出土している(青森県立郷土館 1984 第10章X)。

穀殻・炭化米

IV層下部から穀殻1点、さらにIV層以下から穀殻数点と炭化米が出土した。出土地点付近からは土師器や大洞A式土器が出土しているが、IV層以下は搅乱層ではないことから、穀殻と炭化米は大洞A式期のものと判断された(青森県立郷土館 1984 第9章VII・第10章IX)。その後、佐藤敏也コレクション研究の一環として亀ヶ岡遺跡出土炭化米の放射性炭素年代測定が実施され、 $879 \pm 20\text{yrBP}$ の年代値が得られた(田中ほか編 2015)。このことから、炭化米の年代は縄文時代晩期に遡るものではないと判断される。

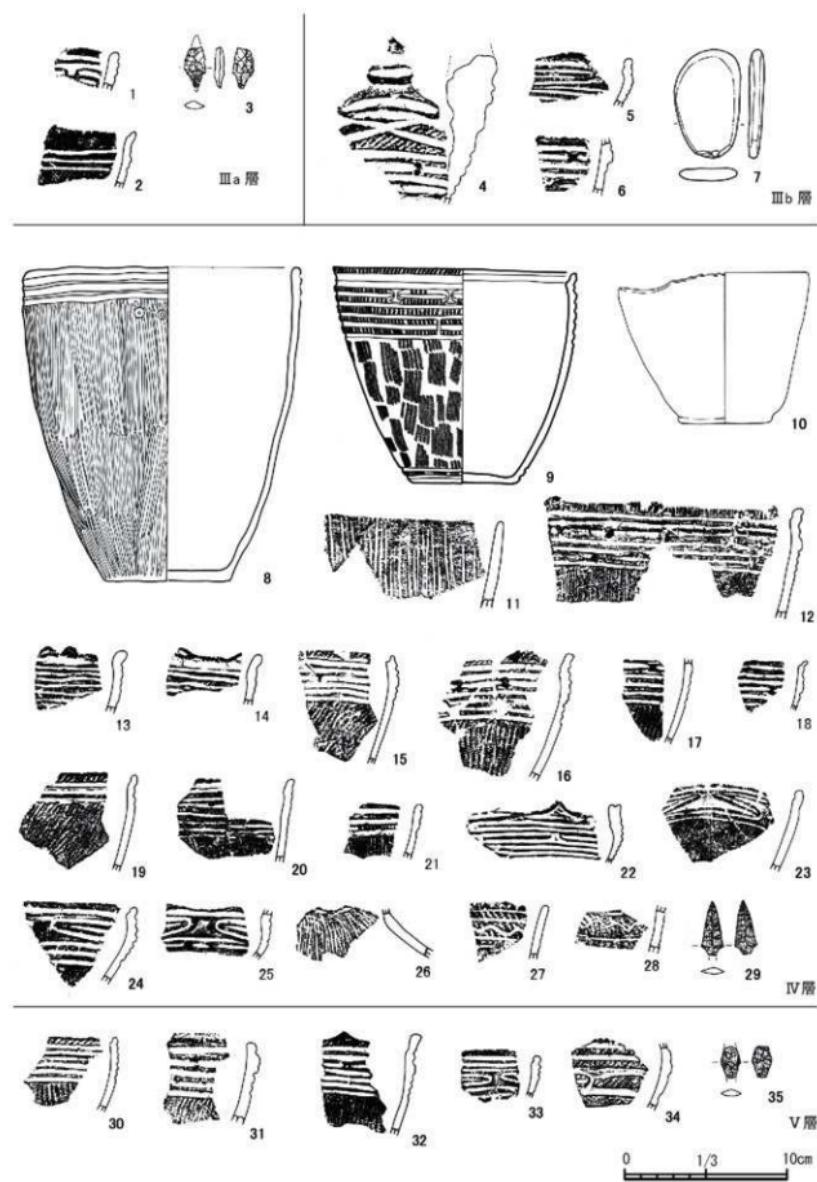


図 4-21 青森県立郷土館 沢根 B 区出土遺物 (1)

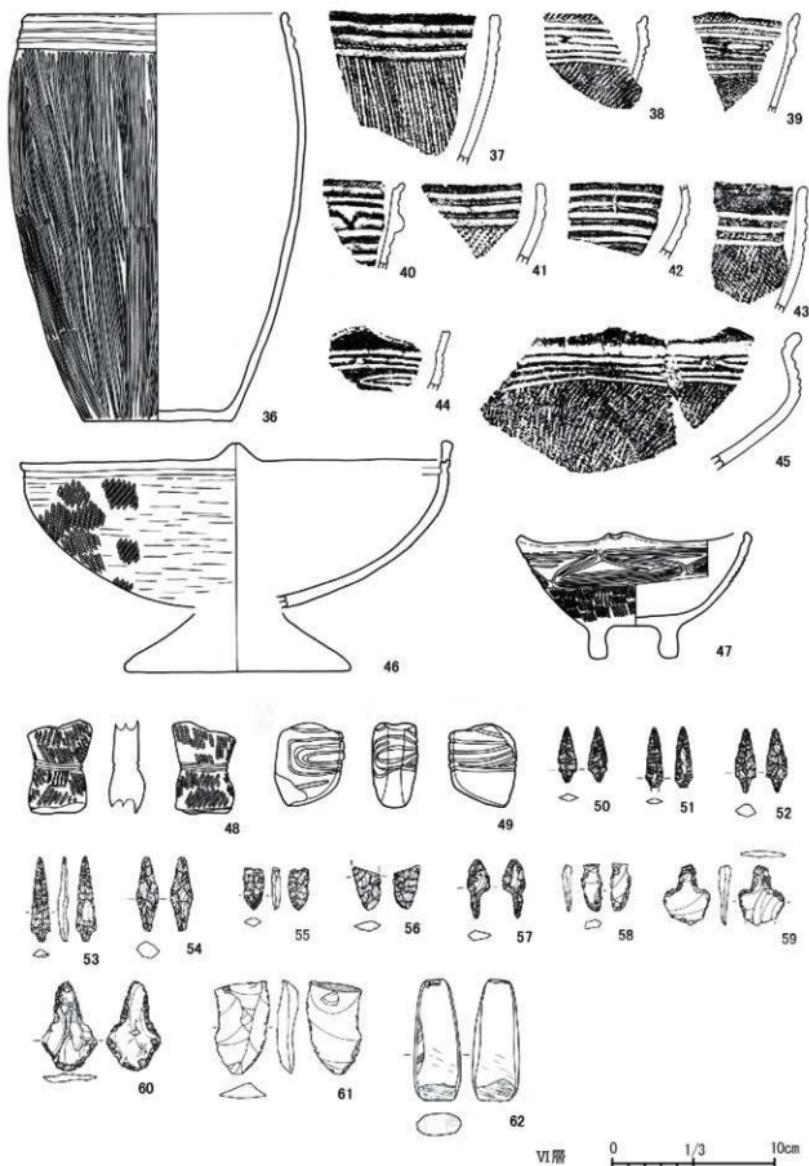


図 4-22 青森県立郷土館 沢根 B 区出土遺物 (2)

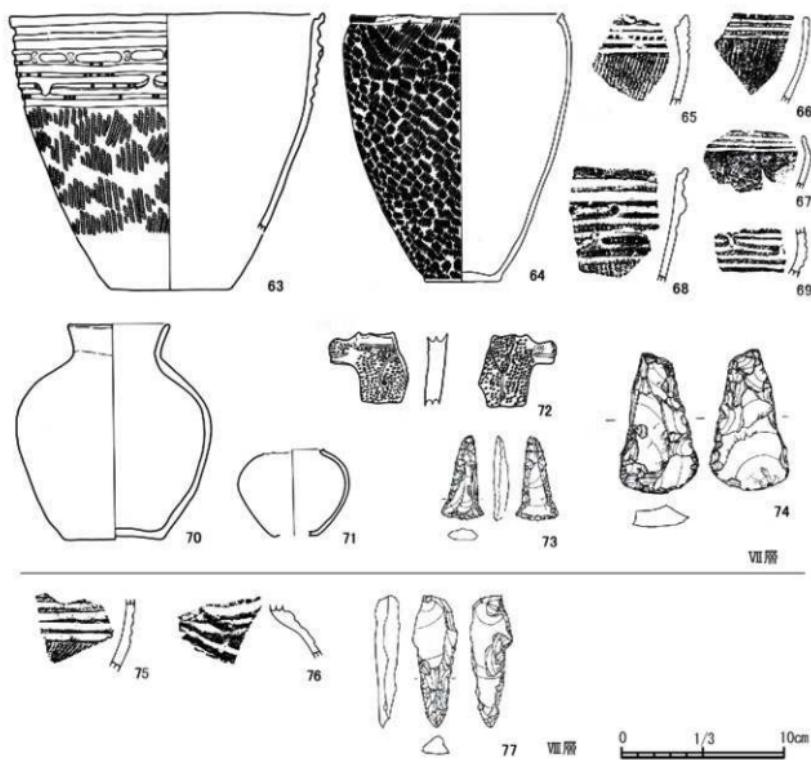


図 4-23 青森県立郷土館 沢根 B 区出土遺物 (3)

【C 区の発掘調査概要】

(1) 層序(図 4-24)

C 区は深さ 2.7m まで掘削が行われたが、純粹な泥炭層は検出されなかった。掘削で確認された最下層の VI 層以下は、ハンドボーリングを実施して判明した土層である。

I 層は暗褐色の表土である。II 層は褐色のシルト層であり、a・b・c に区分される。遺物は少ないものの IIa 層から粗製深鉢が倒立状態で出土しており、II 層以下は擾乱を受けていると推定されている。

III・IV 層は遺物包含層であり、遺物の出土量が多い。III 層は褐色のシルト質粘土層で、葦の根や木炭を含む。

a・b・c に細分され、下位ほど遺物の出土量が多くなる。IV 層は黒色の強い泥質土であり、木炭やクルミ、骨片などの自然遺物を含む。a・b に区分されるが、遺物出土量には差がない。V 层は黒色の無遺物層で、a～d に細分される。上位は IV 層に似て泥炭質を呈するが、下位ほど植物の混入が少くなり、砂質を帯びる。VI 層は灰黄色の砂層で、下位ほど粗粒となり灰色が強くなる。VII 層はハンドボーリングによって検出された砂層で、VI 層とともに非常に固い。その下の層は VII 層と仮称され、砂がなくなる可能性が予測されたが、未発掘のため泥炭層であるかどうかは不明である。

(2) 遺物(図 4-25～4-28)

土器

晩期の大洞 B 式から C2 式期まで確認されたが、主体となるのは大洞 C1・C2 式期である。

II 層からは粗製深鉢が倒立した状態で出土した(1)。口縁部には 3 条の平行沈線がめぐり、胴部に縦走縄文を施す。2・3 は大洞 C2 式の特徴を有する精製および半精製の鉢であり、2 個 1 対の小突起を口頭部に貼り付けている。鉢は、口頭部が「く」字状に屈折するものが多い。8 の壺は頭部が無文、肩部に縦走縄文が施され、大洞 C2 式期に見られる特徴である。

III 層では大洞 C1 式期の土器、および大洞 A 式期に伴出する粗製土器も出土するが、主体は大洞 C2 式期である。18 は完形の鉢で、基調となる C 字文を上・下向きに交互に配し、三叉文・弧線文を充填させた雲形文が展開する。破片では、口縁部や胴部上半に向き合う C 字文を施した鉢(21・22)、口縁部に平行沈線がめぐり、胴部には縦走縄文を施した深鉢・鉢(16・17・19)などがある。

IV 層は、IV 層上部(IVa 層)と IV 層下部(IVb 層)に分けて報告された遺物(図 4-28)と、IV 層で一括して報告された遺物(図 4-26・4-27)がある。IVa 層では、X 字文が施された大洞 C2 式の台付鉢(69)や、胴部に C 字文や弧線文が組み合って雲形文の展開する浅鉢(80)、頭部に隆帶と B 突起を配した大洞 C1 式期の漆塗りの壺(83・84)、無文の浅鉢などが出土している。粗製土器には、全面に縄文のみ施されたものと、口縁部に平行沈線や刻み目帯、ないしは無文帯を有するものがある。IVb 層では、大洞 C1 式期の壺(88)や底部に磨消縄文手法による X 字文を施した注口土器(91)などが出土している。

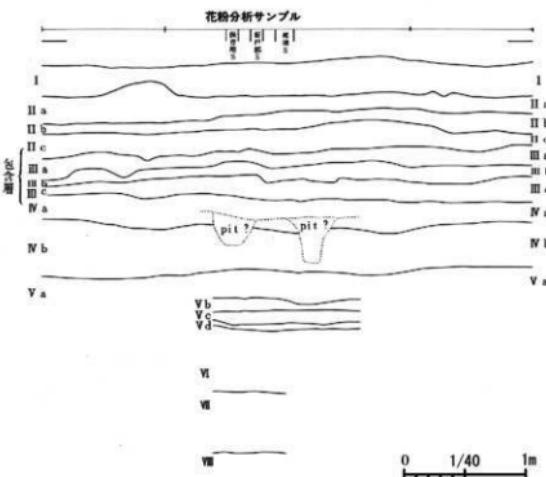


図 4-24 青森県立郷土館 沢根 C 区土層断面図(青森県立郷土館 1984)

IV層一括資料では、大洞B～C2式期の土器が確認される。29・30は口縁部に入組三叉文の施文された鉢であり、大洞B式期である。26は口縁部に羊歯状文の施文された鉢である。32・33は口縁部に太い沈線によるS字文が横位に展開する。口縁部に平行沈線間の刻み目帶ないし刺突列がめぐる鉢も多数出土している（34～40）。羊歯状文の名残を示す文様（35）もあり、大洞C1式期と考えられる。粗製深鉢はより上層と同様、口縁部に平行沈線をめぐらすものと、全面に縄文を施すものがある。縄文の施文方向に縦位と斜位があり、口縁部に無文帯を設ける場合もある。縄文のみが施された深鉢口縁部には、内側に肥厚するものが目立ち（45～47）、口縁にB突起を有する場合もある（46・47）。さらに、注ぎ口を有する粗製の片口深鉢（48）も少数出土した。50は口縁部に入り組むC字文が横位に展開する鉢である。壺は完形あるいはほぼ完形のものが多数出土した（52～63）。52は肩部にC字文を上下方向に交互に配した雲形文が展開し、54・55は頸部と肩部の境が隆帶ないし沈線で区画され、その上にB突起が貼付される。57～61は縄文のみ施された壺である。62は無文の長胴壺である。64は漆塗りの台付鉢であり、台部に1条の隆帶がめぐり、隆帶上にB突起4単位が配される。隆帶の上下方にはC字状の透かしが施される。

なお、砂層のV層は無遺物層と報告されているが、IV層との境界近くで若干の遺物が出土しており、斜行縄文を施した粗製深鉢と、後期の十腰内I式期の深鉢（93）が1点ずつ破片で確認された。

土製品（青森県立郷土館 1984 図39）

円板状土製品が計7点出土しており、うち3点は有孔である。いずれも粗製深鉢の胴部破片を再利用したもので、縄文が施されている。

石器

石鏃はII～IV層から出土している（9・10・24・65・66）。有茎が主体であり、茎部にアスファルトが付着しているものが多い。石材は1点のみチャートで、他は頁岩である。25はIII層出土の石匙で、素材剥片末端部の角につまみ部が作出されている。67はIV層出土の石錐であり、つまみ部を有し錐部先端を欠損する。68はIV層出土の打製石斧である。その他、石箒・スクレイパー・磨石・凹石・敲石・砥石等が出土した。スクレイパーは素材剥片の一部に刃部を作り出したもので5点出土した。磨石は8点出土し、側縁部等に摩耗痕がある。凹石は自然石の中央部に敲打痕があるもので8点出土した。使用痕には片面のみと両面がある。敲石は2点出土し、礫の側面および裏表面に軽い敲打痕が残る。砥石は、平砥石と有溝砥石の2種が出土している。前者は片面のみに、後者は両面に筋状の溝が認められる。

この他、黒曜石の原石および剥片が204点出土した（青森県立郷土館 1984 PL39下）。

石製品（青森県立郷土館 1984 PL39上）

小型丸玉の半損品1点、丸玉未成品9点、原石40点が出土している。出土層位はIV層が最多である。未成品には穿孔途中のもの1点、一部を研磨したもの8点がある。石材は緑色珪質凝灰岩である。

縄（青森県立郷土館 1984 PL38）

撚紐を束ねた縄の断片が2点出土しており、表面には赤と黒の漆が付着している。細い撚紐を100本程束ねて1本の縄にしており、それぞれの撚紐を固定するために細い撚紐で水平方向に結んでいる。この縄については、漆滲しに使われた編布とする理解もある（小久保 2013）。

漆器（青森県立郷土館 1984 図39）

櫛と籠胎漆器がそれぞれ1点出土している。櫛は齒の部分を欠くが、齒は12本以上あったと推定される。籠胎漆器は漆部分しか残存していないが、浅鉢形の可能性が高い。

その他

漆かアスファルトと推定される、被膜状の黒褐色の液状物質が1点出土しており、土器等の容器に入っていたものが剥離したと推定される。動物遺存体では、C2区IV層からシカ・イノシシ等の陸獣骨やアシカ・オットセイといった海獣骨が出土している（青森県立郷土館 1984 第10章X・PL40）。

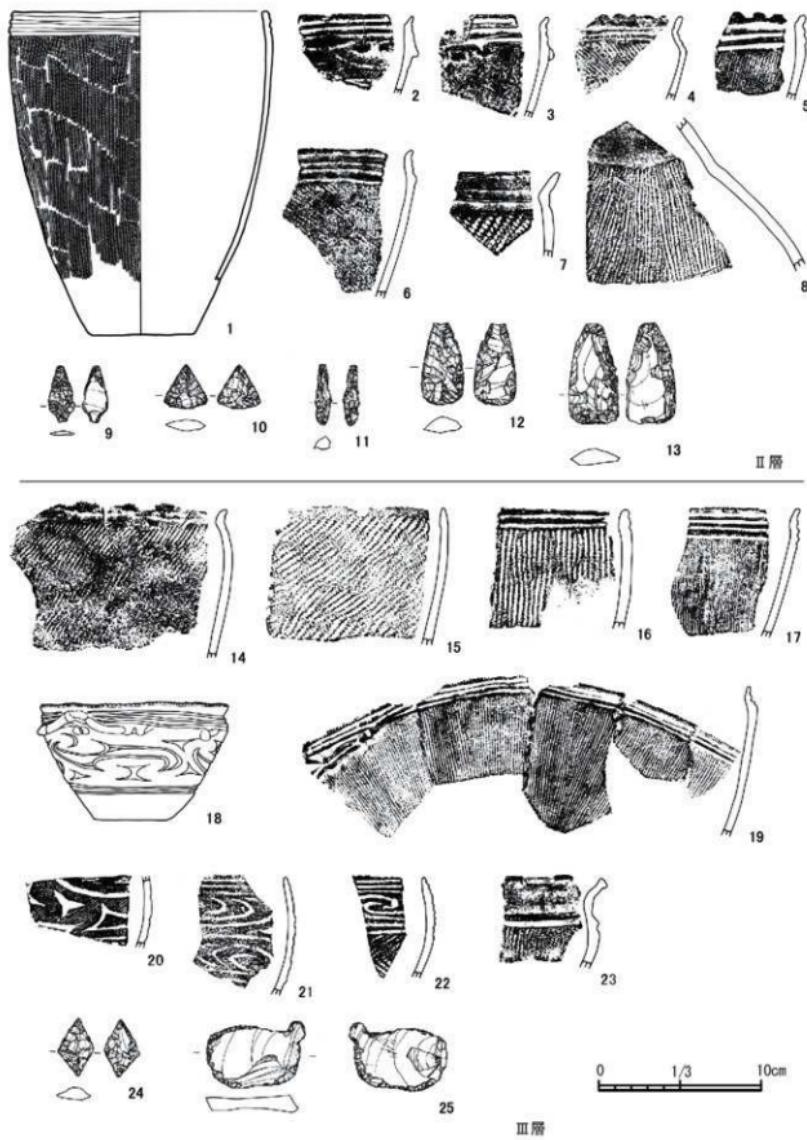


図 4-25 青森県立郷土館 沢根 C 区出土遺物 (1)

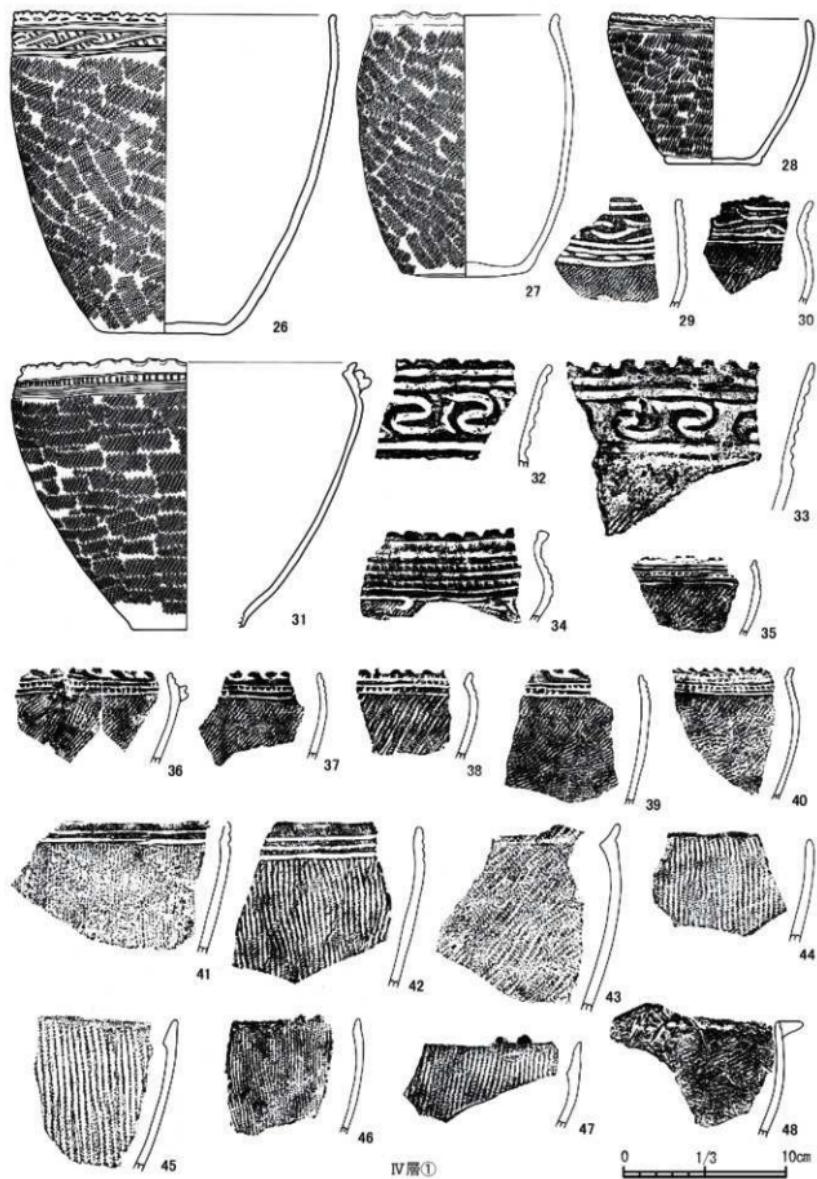


図 4-26 青森県立郷土館 沢根 C 区出土遺物 (2)

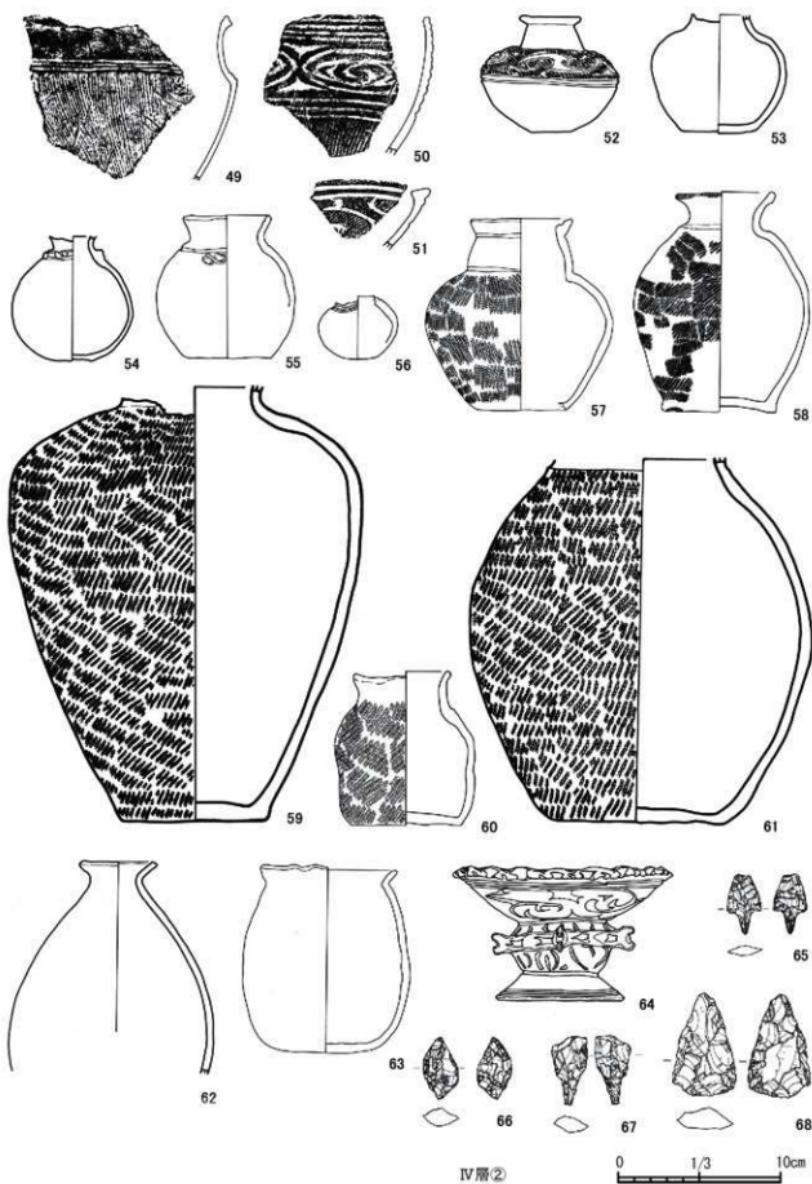


図 4-27 青森県立郷土館 沢根 C 区出土遺物 (3)

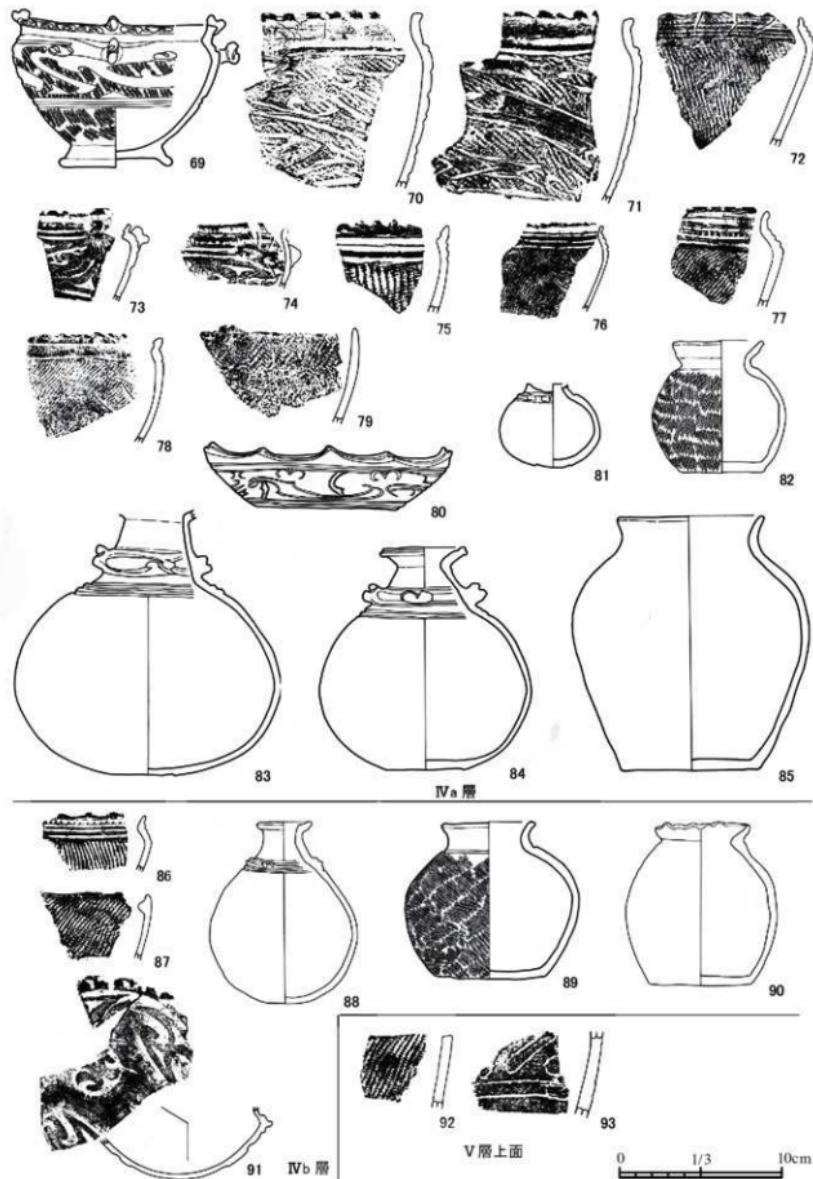


図 4-28 青森県立郷土館沢根 C 区出土遺物 (4)

【D 区の発掘調査概要】

(1) 層序(図 4-29)

D 区は丘陵斜面にかけて設定されたが、地表の大部分で現代の擾乱が確認された。I 層は擾乱層であり、Ic 層は盜掘坑と推定される。II 層と III 層は主要な遺物包含層で、当時の生活面である。特に III 層の方が出土量が多く、どちらも炭化物を多く混入する。II 層は黄褐色土層で、酸化鉄を多く含む。粘性から a・b に区分される。III 層は褐色の泥質土層で、湧水が著しい。色調から a・b に区分される。層厚は斜面下方で 40 cm 程度であるが、遺物の出土量は極めて多い。なお、当時の低湿地と丘陵部との境界は、堆積状況から D6 区付近にあったと推定されている。

IV 層も a・b に区分されるが、IVb 層の方が砂質は強く、IVa 層は漸移層の性格を持つ。V 層も色調から a・b に区分され、青灰色の Vb 層は完全な地山である。なお、丘陵斜面の砂層は黄色が強く、低湿地の青灰色砂層からは漸移的に変化している。

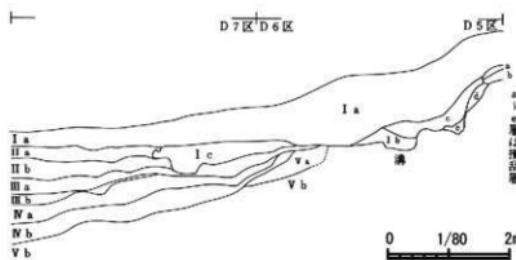


図 4-29 青森県立郷土館 沢根 D 区土層断面図
(青森県立郷土館 1984)

(2) 遺物(図 4-30~4-34)

土器

I 層は擾乱のため、出土土器は少ない。磨消繩文手法による入組文が施された朱塗りの壺や、太い条痕のある深鉢などが出土した。

II 層は上部を IIa 層として分けて報告されている。IIa 層では、C 字文や三叉文が施文された精製の鉢 (9~11)・浅鉢・皿や、口縁部に平行沈線や沈線間の刺突列を施した鉢 (12~16)、平行沈線と突起のある壺、繩文のみ施された粗製土器などが出土している。

II 層も土器は同じ様相であるが、IIa 層に加えてより多くの器形・文様が確認された。深鉢 (19~25) の多くは縦走繩文や斜行繩文が施されるが、胴部に条痕文を施すもの (24) も確認できる。鉢 (26~41) は、口縁部に平行沈線と沈線間の刻み目ないし刺突が組み合わせて施されるもの (28~33) と平行沈線のみ施されるもの (35~40) が目立つ。前者の刻み目や刺突は連続的なもの (28・31) と沈線間を上下に交互するもの (29・30・32・33) があり、中には羊歯状文の痕跡を残すものもある。また、口頭部が「く」字状に屈折し、そこに無文帶を設けるもの (34・36) もある。27 は口頭部に 1 条の刻み目帯と 2 条の平行沈線が施され、その下位に把手状の突起が貼付される台付鉢である。浅鉢・皿 (42~47) には胴部に C 字文を基調とする雲形文が施文され、口縁に A 突起を有するものもある (44)。壺 (48~51) には繩文のみの施文や無文のものに加え、平行沈線や磨消繩文手法による入組文を施すものもある。52・53 はミニチュア土器である。なお、前期の円筒下層 a 式の可能性ある土器底部も 1 点出土しており、網代痕が確認できた。

III 層も概ね II 層と同じ様相が見られるが、破片資料のほか完形土器および復元可能な土器が多数出土している。完形土器には壺・皿・鉢・注口土器がある。また、磨消繩文手法による入組文が施された壺・皿には朱が塗布される。深鉢 (80・82・83) は口縁部に平行沈線や沈線間の刻み目が施される。

口縁から胴部の全面に斜行縄文あるいは条痕の施されるものもある（81・84）。鉢・台付鉢の口頸部には羊齒状文の施文も認められるが（90）、多くは平行沈線と刻み目ないし刺突が組み合わせて施文されるもの（87・91・97～99・101）である。刻み目ないし刺突は沈線間を上下に交互しながらめぐるもののが目立つ。93は片口を有する鉢である。浅鉢・皿はC字文を基調とする雲形文が施文される（103～105）。壺は、頸部と胴部ないし肩部の境が隆帯や沈線で区画され、隆帯や沈線上にB突起が貼付されるものもある（107～110）。111・112は口縁にB突起が貼付され、頸部と肩部の境に段を有する。117の注口土器は胴部が屈折し、B突起を有する鈞状突帯がめぐる。その上下にはX字文が展開する。

IV層は、II・III層に比べて出土量が少ない。口縁部に平行沈線、沈線間の刻目帶や刺突列、無文帶を設けた深鉢や鉢が主体となり、口縁から胴部全体にかけて縄文のみを施した深鉢も出土した。鉢の中には羊齒状文の崩れた文様を施文したもの（141・142）もある。また、口頸部に無文帶を設けた壺（149）も出土した。

土製品

I・III層から円板状土製品が5点出土した（1・2・118～120）。いずれも粗製土器の胴部破片を利用したもので、120のみ有孔である。

石器

石鏃はI～III層から出土している（3～5・54・121～123）。いずれも有茎であり、4は茎部にアスファルトが付着する。刃部の形から二等辺三角形、菱形、正三角形の3種に分類される。石槍はII～IV層から出土した（55・56・150）。150は木葉形を呈する。石匙はI～III層から出土した（6・58・59・126・127）。58が横型、その他は全て縱型である。つまみ部の作り出しが明瞭だが、127は縱長剥片の片側にノッチ状の二次加工を加え整形するのみである。石箇はIII・IV層から出土している（128・151）。60はII層出土のスクレイパーであり、素材剥片の側縁部と末端部に刃部を作出している。57はII層出土の石錐であり、つまみ部の作り出しが明瞭である。7はI層出土の石錐であり、長椭円形の自然石の両端部を加工している。61・130・131・152はII～IV層出土の敲打石である。61・130は上下両端の敲打痕と両側縁等の擦痕、131は上下両端の敲打痕、152は両側縁の敲打痕とそれに伴う溝状の傷、表裏面の凹孔が認められる。この他磨石が多数出土しており、うち1点にはアスファルトが付着する。8・129は砥石の破片である。8は有溝砥石であり、正面に1条、裏面に2条の溝が確認できる。129は断面三角形状の縫を用いた平砥石で、一側面が被熱する。

この他、黒曜石の原石および剥片も多数出土している（青森県立郷土館1984 PL65下）。

石製品

62は上下端ともに欠損する石劍である。正面は全面に研磨が及び、裏面も節理面での分割後に縁辺が研磨により整形される。63は上下端を欠損するスレート製の石棒である。全体が研磨により整形され、残存部中ほどにアスファルトが付着する。132は報告書で「模型石器」として報告されているが、再報告では石冠の可能性が指摘されている（鈴木・川口1985）。器面全体に研磨が及ぶ。

緑色珪質凝灰岩製の玉類とその原石が多数出土した（64～73・133～135）。主要な包含層はII層であり、一部はIII層からも出土した。内訳は完成品が3点、未完成品が18点、原石が55点である。完成品の直径は6～15mmと大きさに幅がある。未完成品のうち、穿孔途中のものが12点、原石の一部を研磨したものが6点ある（青森県立郷土館1984 PL65上）。

漆器

籠胎漆器の破片が数点出土しており、砂粒が付着している（青森県立郷土館1984 PL66）。

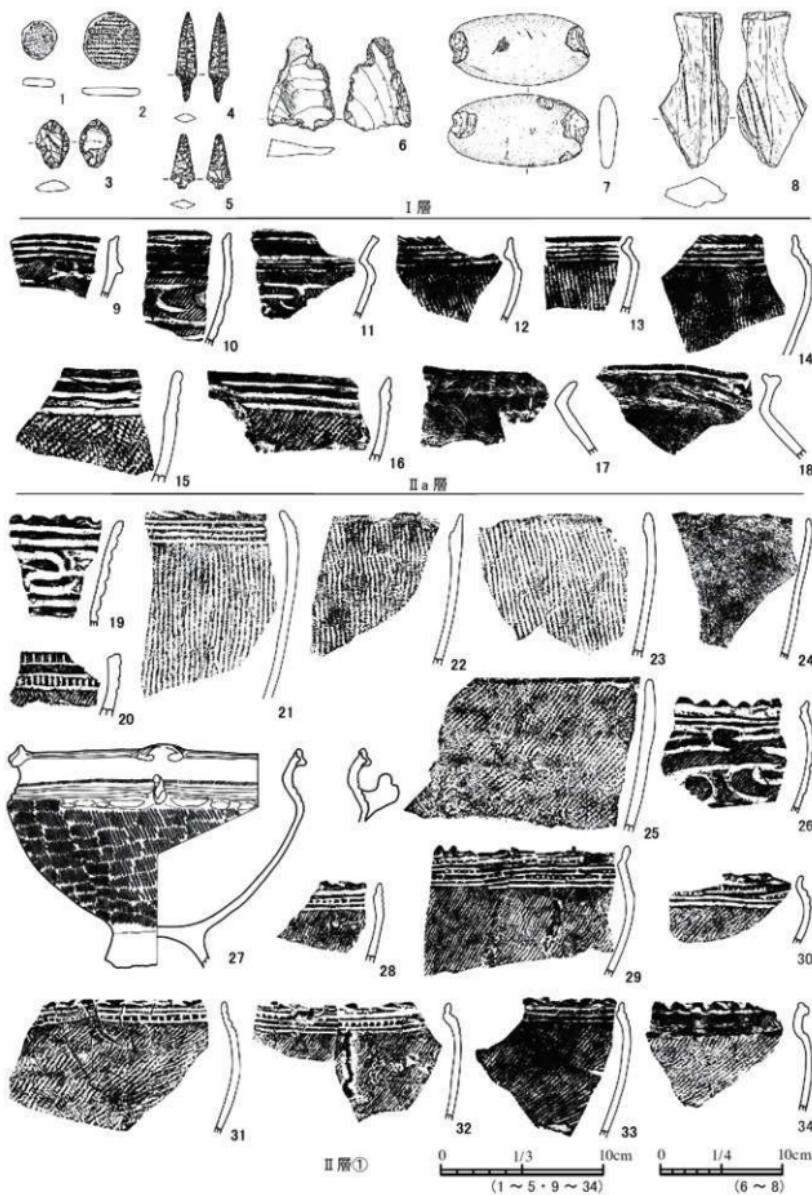


図 4-30 青森県立郷土館 沢根 D 区出土遺物 (1)

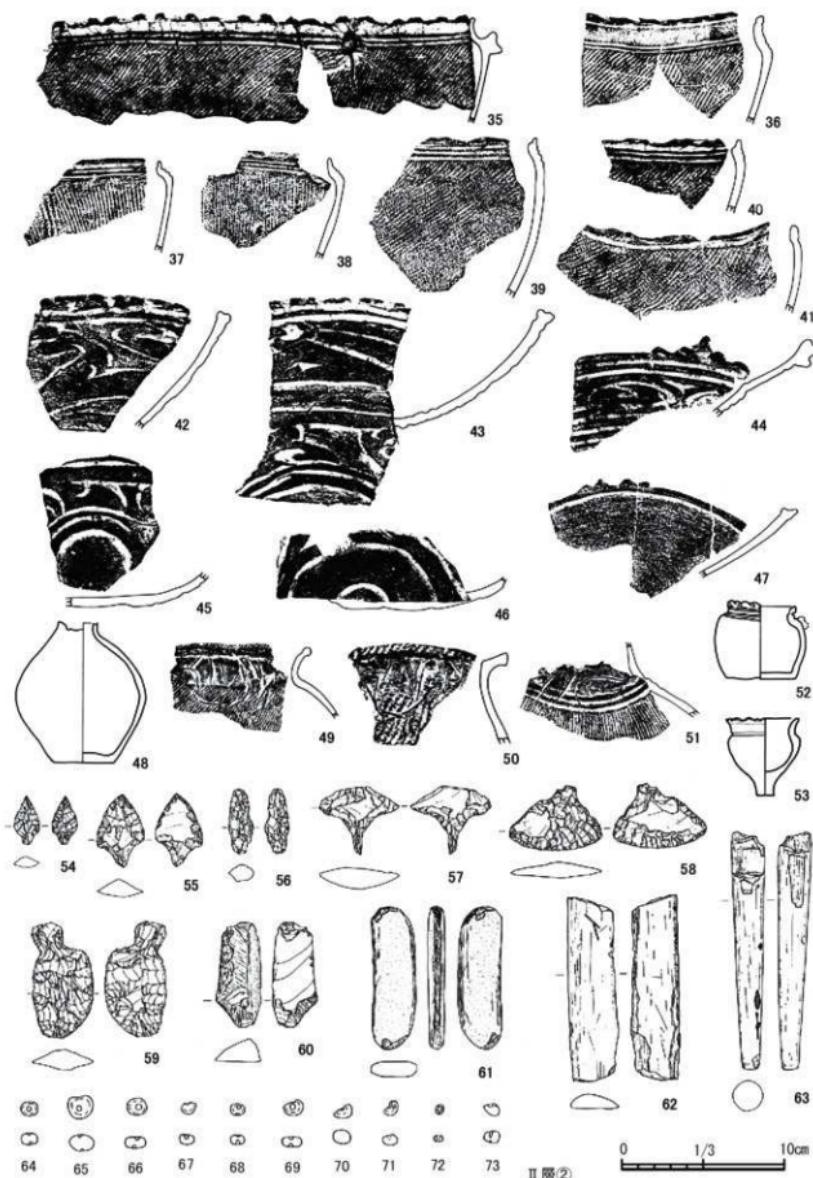


図 4-31 青森県立郷土館 沢根 D 区出土遺物 (2)

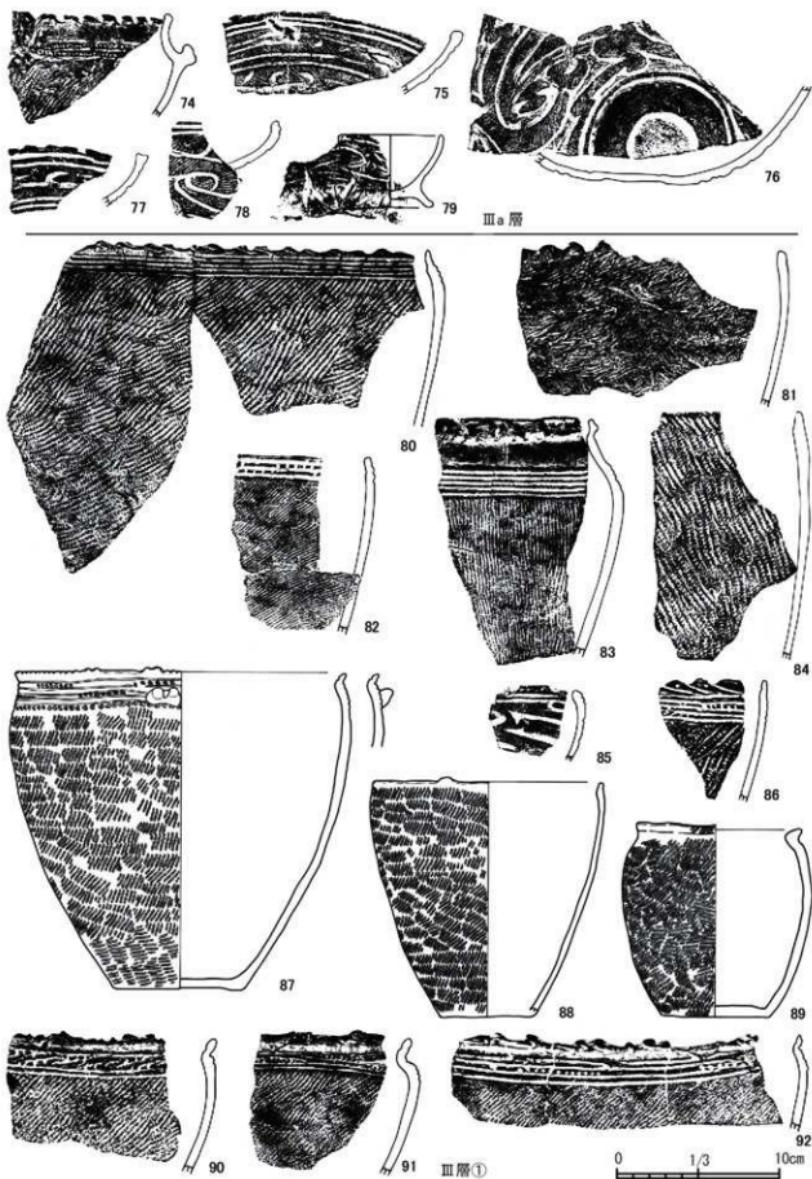


図 4-32 青森県立郷土館 沢根 D 区出土遺物 (3)

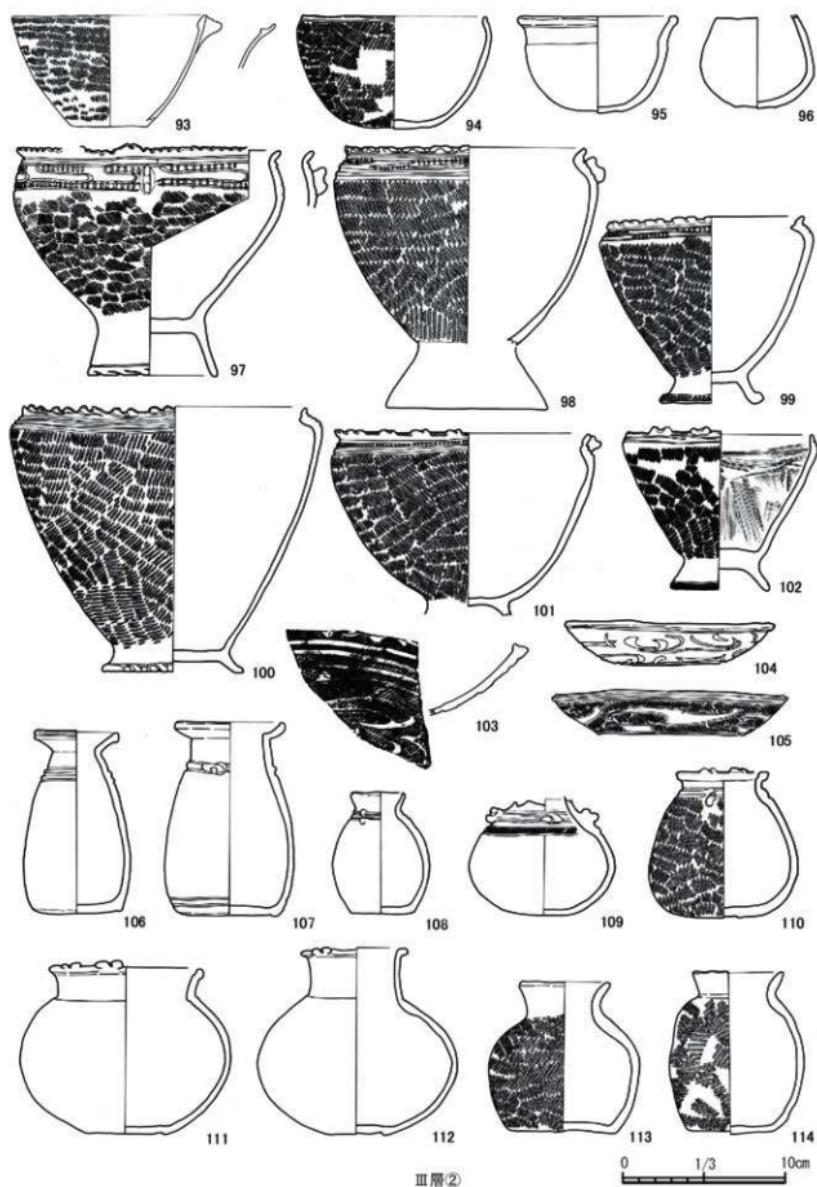


図 4-33 青森県立郷土館 沢根 D 区出土遺物 (4)

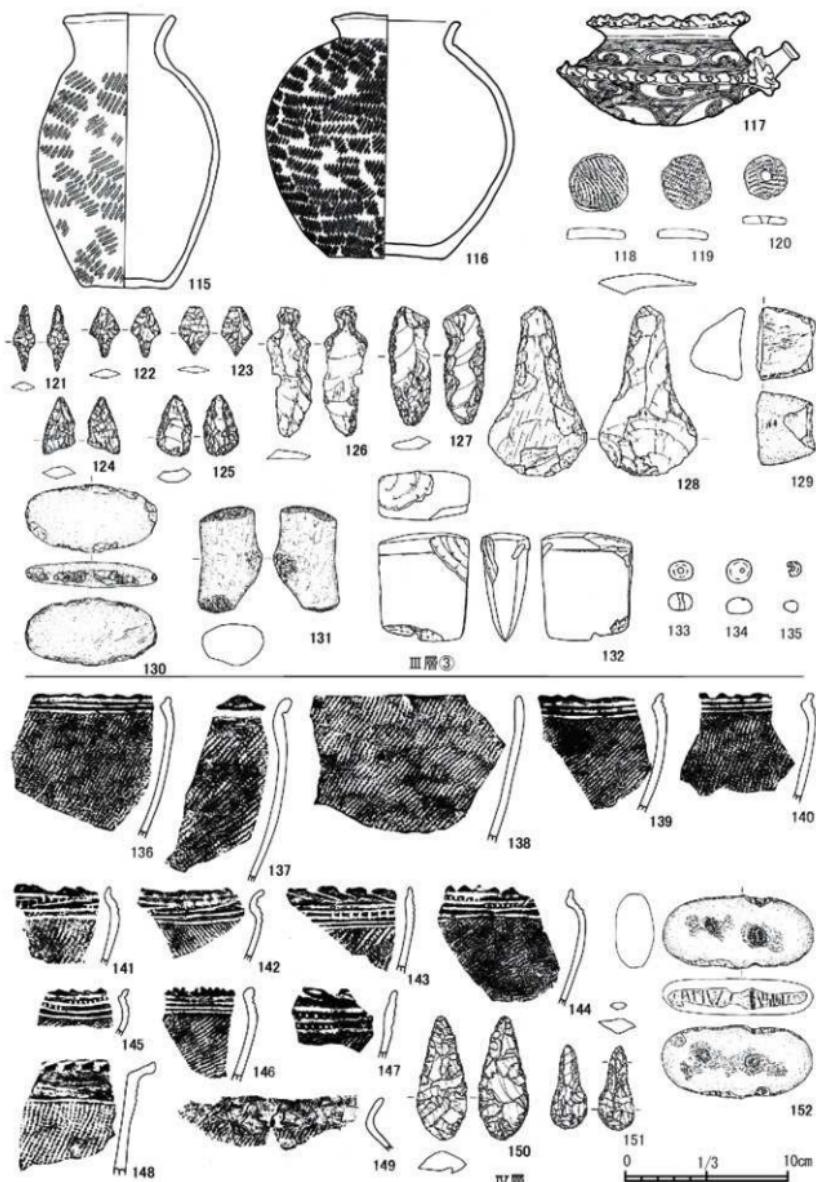


図 4-34 青森県立郷土館 沢根 D 区出土遺物 (5)

3. 青森県教育委員会による県道地点の調査

(1)概要

県道鰐ヶ沢蟹田線の改良工事(亀ヶ岡バイパス建設)の範囲に亀ヶ岡遺跡の東縁部がかかることになり、青森県教育委員会により昭和48(1973)年に路線内の緊急発掘調査が行われた。遺跡の周知化範囲の東縁、史跡範囲の直ぐ東側に位置する。遺跡東端部を南北にほぼ継断する調査区が設定された。発掘面積は472m²である。旧田地内の泥炭層が主たる遺物包含層となり、土器・石器に加えてガラス玉や木製品を含む縄文時代前期から弥生時代の包含層遺物、珠洲焼捕鉢・須恵器片が出土した。

(2)地形・層序(図4-35・4-36)

調査地点は亀山丘陵東端部に位置する。バイパス道路予定地内を概ね南北に継断する調査区を設定し、東西方向に調査区内を横断する農道を境に南側をS地点、北側をN地点と名付けた。4×4mを一単位にしてグリッドを設定し、西から東へA~D、北から南へ1,2…と付番した。

県営土地改良事業「西津軽地区かんがい排水事業」が国営事業に付帯して行われ、西津軽地域全体の乾田化・用排水分離が1969~88年に推進されている状況

(西農村整備事業編 1996)であった。台地縁辺部の地形に沿ってコンクリート製の県営平瀬用水路が調査の直前に作られたために、バイパス路線部の西側の一部は調査対象となっていない。水路建設によりこれらの範囲は若干の損傷を受けたと思われる。また、これら西側部分が調査対象となっていないため、台地斜面と低湿地部の間の土層の接続状況は不明な点を残す。

SB-13グリッドの南北セクションの土層がS地点では最も安定しており、慶應義塾大学調査と比較するための標準土層として捉えられている。各々の層厚と共に示す。

第I層 黒色砂質腐植土層 20cm 表土	第II層 褐色粘土質泥炭層 15cm
第III層 灰色粘土層 25cm	第IV層 黑褐色泥炭層 20cm
第V層 暗褐色泥炭層 30cm	第VI層 砂層漸移帶層 10cm
【基盤層 淡青綠色中粒→粗粒砂層】	

N地点のNA-9・10グリッドでは縄文時代晩期の良好な包含層を得られたとの記載が遺物の項にあるが、上層は農道や水路の建設によって搅乱を受けたと報告され、土層の断面図や写真も提示されていない。N地点III層の黒灰色砂質粘土層に相当するものと考えられる。

これらの土層の中で、第III層の灰色粘土層がどの地区でも削平を受けておらず、低湿地の沢根地区のみならず丘陵上を含めた他調査区の土層との対応関係を分析する際の鍵となることが新戸部隆によつて報告書中に指摘されている。この第III層はS地点において北側で薄く、沢根地区に近づく南側に行くほど厚くなる。従つてS地点の中でも、北側では黒褐色層と暗褐色層の区分が明確でない一体の泥炭層として認識される。なお、SB-12・13グリッドでは、泥炭層直下の第IV層から植物遺存体が多く出土した。

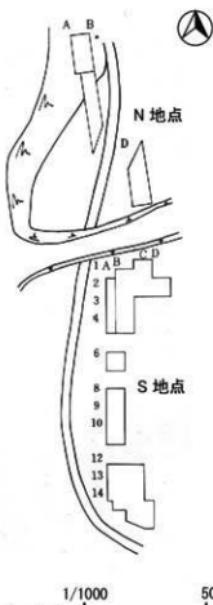


図4-35 青森県教育委員会調査区位置図
(青森県教育委員会 1974を一部改変)

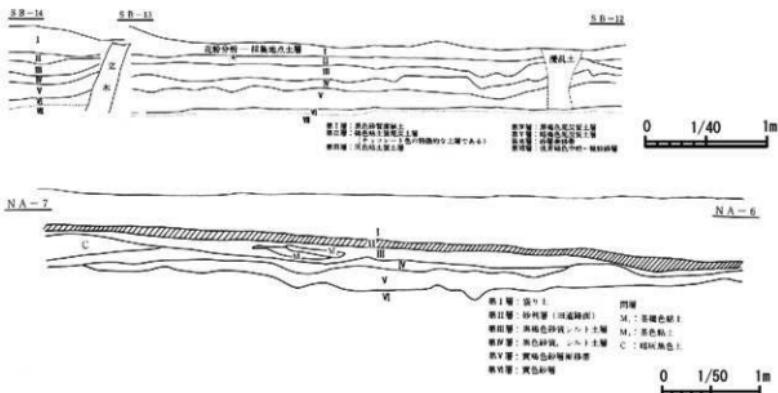


図 4-36 青森県教育委員会調査区土層断面図（青森県教育委員会 1974）

(3) 遺構 (図 4-37)

丘陵の最先端部にあたる旧県道の下から、砂岩質砂層を掘り込む楕円形のピット状遺構を検出した。遺構内堆積土は8層に分かれており、遺物は縄文土器細片、黒曜石製の剥片およびチップ、石皿破片、須恵器片が出土した。また、遺構付近の包含層からは珠洲焼の擂鉢が出土している。

(4) 遺物 (図 4-38~4-44)

土器

N 地点

II 層からは縄文時代後期～弥生時代中期の土器が出土したが、主体となるのは後期前葉～晚期中葉頃の土器群である。1～7は後期中葉および後葉の土器である。1・2は十腰内 II 群で、平行沈線文・クランク文が施文される。3～7は十腰内 V 群で、数条の沈線による弧状文と貼瘤が施される。

8～16は縄文時代晚期前葉～中葉頃の土器で、深鉢・鉢等の器種構成を示す。8は口縁部に入組文の施文された深鉢である。10は鉢で、胴部に磨消縄文手法による X 字文が施文される。11～13は口端部に連続する刻み目を有する鉢で、口縁部には平行沈線間の刺突列がめぐる。17は胴部に楕円文が施文された鉢であり、晚期後葉頃に位置づけられる。その他、口縁から胴部にかけて縄文のみ施される粗製深鉢が出土しており（18～21）、18は口縁に突起を有する。

22は地文として斜行縄文を施した上に、沈線で鋸歯文を施文している。弥生時代中期の田舎館式に位置づけられる。

III 層からは縄文時代中期・後期・晚期および弥生時代中期の各時期の土器が出土した。

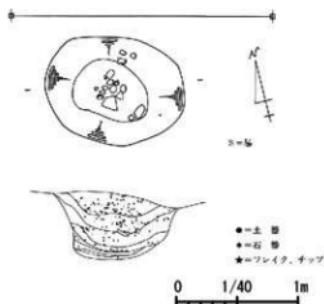


図 4-37 青森県教育委員会 N 地点
ピット状遺構平面・断面図
(青森県教育委員会 1974)

28～30は中期初頭の円筒上層a式の深鉢である。28は山形突起下にY字状の隆帶、29・30は波状口縁直下に縦位の隆帶が貼付される。29・30の口縁部には3条の平行する押圧縄文が施され、その間に竹管文が施文される。

31～38は後期中葉～後葉の土器である。31は口縁部に無文帯を有する鉢であり後期中葉頃に位置づけられる。33・34は十腰内IV群の深鉢で、口縁直下に縦位の刻み目がめぐる。胴部は連繫する木葉状帶文が展開し、沈線により区画された文様帶内に羽状縄文が施される。35～37は羽状縄文の施された十腰内IV群土器である。38は沈線による弧線文の施された十腰内V群の注口土器である。

39～48は晩期前葉～後葉頃の土器である。深鉢・鉢・壺等が出土した。39は胴部に入組文の施文される深鉢である。40・41には羊歯状文が変形した連続刻み目が施文される。42は沈線間の刻み目帯を有し、胴部に入組文が施文される。44は口縁部に3条の平行沈線が施され、その下位に縦位の条痕が施される。47は胴部に変形工字文が施文される。

49・50は弥生時代の土器である。49は口縁部に鋸齒文が施文され、口唇部には連続する刻み目を有する。中期の田舎館式期に位置づけられる。

S 地点

II層からは、縄文時代前期～晩期および弥生時代前期の土器が出土したが、主体となるのは晩期中葉～後葉頃の土器群である。

60・61は前期末葉、円筒下層d1式の深鉢である。口縁部に横位および斜交する押圧縄文を施し、隆帶を有する。

63は後期中葉の十腰内II群土器である。沈線によりクランク文が施文される。

64～86・92～94は晩期中葉～後葉頃の土器群である。深鉢・鉢・台付鉢から構成される。64・65は大洞C2式期の台付鉢である。口端部に刻み目を有し、口縁部に平行沈線ないし沈線間の刺突列がめぐる。66は口縁に4単位のA突起を有する台付鉢である。A突起下の左右にはB突起が配される。口縁部には磨消縄文手法による長梢円文が施文され横位に展開する。69は口縁にA突起を有する鉢で、胴部にC字文が施文される。70～77は口縁から胴部にかけて、工字文あるいは粘土粒貼付や押し曳きによる結節沈線が施される。74は口縁にB突起が配される。82～85は変形工字文が施文された鉢ないし台付鉢である。86は長梢円文が施文された鉢である。92～94は壺であり、92は胴部上半に沈線で文様帶が区画され、磨消縄文手法による大腿骨文が施文される。93・94は肩部に横位連続工字文が施文される聖山I式の壺である。

87～91は弥生時代前期の鉢である。89・90は口頸部に2・3条を単位とする平行沈線、胴部に縦走縄文が施される。91は沈線文と刺突文が施された兜状の口縁把手である。

III層からは、縄文時代前期～弥生時代前期にかけての土器が出土したが、後期中葉～後葉および晩期前～後葉頃の土器群が主体となる。

115は前期末葉、円筒下層d1式の深鉢である。口縁部に横位および斜交する押圧縄文を施す。

117・118は後期中葉の深鉢で、口縁直下に縦位の刻み目がめぐる。119～121も同時期の深鉢や壺であり、沈線で区画された弧状文が展開する。

122～143・147は晩期前葉～後葉の土器群である。122～124は弧線文、入組文、三叉文が施文される深鉢・鉢で、晩期前葉に位置づけられる。127は口縁部に平行沈線と連続する刻み目が施される。126は口頸部と胴部の境にB突起が貼付され、胴部に連繫入組文と平行沈線が施文される聖山I式の鉢である。134～138の深鉢・鉢は口縁部に平行沈線、結節沈線、匂字文が組み合はされて施される。142・143は口縁部に平行沈線、胴部に縦位の条痕文が施される。147は肩部に連繫入組文の施文された聖山I式の大型壺である。

144～146は弥生時代前期、砂沢式期の鉢である。146は口縁から胴部にかけて波状工字文が施文

される。

IV層からは、縄文時代晚期前葉頃の土器群が出土した。164～166は口縁部に王抱三叉文の施文された深鉢である。174は口唇部に刻みを有し、平行沈線間に刺突列が配される浅鉢である。175は口縁直下と胸部全体に斜行縄文の施された壺である。

V層からは、縄文時代前期・後期の土器が少量出土した。180は木目状撚糸文を施された円筒下層式の胸部破片である。181は後期中葉の十腰内II群の深鉢で、大波状口縁を有する。口縁部には沈線によるクランク文が施文される。

土製品

23はN地点II層出土の土偶である。右腕と下半身を欠損し、顔部表現は認められない。この他、出土地点・層位は不明ながら、上半身が残存しており顔面の様相が分かる土偶が出土している。眉と口には縄文が施されている（青森県教育委員会1974図49の1）。

同じく出土地点・層位は不明ながら土版の破片が1点出土している。形状は長楕円形または長方形と推定され、裏表に沈線による重層L字文が施されている（青森県教育委員会1974図48の12）。

円板状土製品はN地点II～III層（24・51・52）、S地点III～IV層（95・96・148～151・176）から出土した。N地点III層出土の51・52が有孔であり、その他は無孔である。土器の胸部破片を再利用しており、表面には縄文が認められる。

石器

石鏃はN地点II～III層（25・53）、S地点II～IV層（97～102・152・153・177）から出土した。その多くは有茎鏃であり、97の茎部と99の側縁部に黒色付着物が認められる。101は回基無茎鏃であり、基部両面に黒色付着物が認められる。利用石材は頁岩、珪質頁岩、メノウである。

S地点II層出土の103は、報告書で「鋸形石器」として分類されている。両側縁の二次加工により尖頭部を作出し、側縁はやや窪む。石材は珪質頁岩である。

石錐はS地点II～III層から出土した（104～106・154）。すべて完形品で、剥片の二側縁を整形してつまみ部を作出するもの（104～106）、厚手の剥片を棒状に整形したもの（154）に分類される。石材は珪質頁岩とメノウである。

石匙はN地点III層から出土している（54～56）。54は横型で、素材剥片末端部への二次加工により刃部が作り出される。55・56は二次加工によりつまみ部が作り出されることから縦型の石匙と考えられるが、刃部形成のための二次加工が不明瞭である。石材は頁岩、珪質頁岩、メノウである。

スクレイバーはN地点III層（58・59）、S地点II～IV層（108・155～160・178・179）から出土した。不整形な剥片を素材として、連続する二次加工により刃部が作り出される。側縁に対する二次加工は片面から施されるものと両面から施されるものがある。石材には頁岩、珪質頁岩のほか、黒曜石もある。

石斧は、S地点II層から磨製石斧1点（110）と打製石斧1点（111）が出土している。磨製石斧は刃部側、打製石斧は基部側を欠損する。石材は磨製石斧が粘板岩、打製石斧が硬砂岩である。

敲石は、N地点II層（26・27）、S地点II層（112）から出土している。26は小型の偏平円礫の全周に不連続な剥離痕が認められ、27・112は偏平円礫の両端に粗い剥離痕が認められる。石材は頁岩と花崗岩である。

161はS地点III層出土の石錘である。扁平な河原石の両端を打ち欠いて凹状に整形するほか、側縁部に敲打痕が認められる。石材は安山岩である。

113はS地点II層出土の完形の石皿である。表裏面ともに、中央部には使用時の磨滅による浅い凹みが認められる。石材は凝灰岩である。

この他、N・S地点では石箆、磨石、凹石、砥石等が出土している。

石製品

114はS地点II層出土の石劍であり、いずれも両端が折損している。この他、刃部がV字状に残存するもの、側縁に1条の溝が彫られたものが出土した。石質はいずれも粘板岩である。

石製の玉類は完成品とともに未完成品および原石が多数出土した（青森県教育委員会 1974 PL17下・18・19）。完成品は3点出土し、丁寧に研磨し整形している。利用石材は緑色珪質凝灰岩および流紋岩である。玉類の整形に使用されたと推定される砥石も出土している。砥石は扁平礫の平坦面を用いて研磨したもので、溝状の研磨痕の幅が玉類の幅とほぼ一致する（前掲PL28上）。

また、玉類の穿孔に使用されたと推定される小型の石錐もII～IV層から多数出土している。本報告では、青森県教育委員会の報告書において写真掲載された小型石錐（前掲PL21上）の一部、および緑色珪質凝灰岩製玉類の製作工程を示す未完成品や完成品について新たに実測図を掲載した（図4-44・表4-1）。

1～5は緑色珪質凝灰岩製の玉・玉未完成品および玉製作工程を示す資料である。5は小原石に2面の平行する磨面が認められ、縁辺には整形のための小剝離痕がめぐる。4は5の状態に近い整形途上の資料であるが、磨面の片側にわずかに穿孔の痕が認められる。3は研磨により両面および側縁の整形が完了しており、両面から穿孔が施されるが貫通に至らない穿孔途上の資料である。1は両面からの穿孔による貫通孔を有する完成品、2は整形後に破損した玉に対し、分断面の研磨および穿孔による再加工の工程が認められる資料である。

以上の資料観察から、5→4→3→1という製作工程をたどることが可能であり、製作途上の破損資料に対しても、2のように再加工が施される場合もあることが確認された。

6～20は玉類の穿孔に用いられたと考えられる小型の石錐である。7のように両側面に丁寧な平坦剥離が施されて錐部が作出される資料もあるが、その多くは素材剥片の側縁部に対して急斜度の二次加工を施して錐部を作出している。こうした石錐の製作には主に玉髓やメノウが用いられるが、その素材剥片は薄いものが多く、もともと小型の剥片が素材となっていたことが窺われる。こうした小型剥片の本来の形状は、22・23のようなものであると考えられ、両極剥離痕や剪断面が観察されることから、台石等を利用した両極打法による剥片生産が推定される。

その他遺物

土器の内側に液体が固まって付着している例が認められた。漆かアスファルトを土器に保存した例と推定される。また、湾曲した平板と棒状の木製品が出土したが、加工痕が認められないため遺物とは断定できない（青森県教育委員会 1974 第50図）。

ガラス玉

SB-2グリッドのII層からガラス玉が1点出土している。直径3.8mmで、中央に直径0.8mmの孔が開けられている。色調はスカイブルーで、内部に気泡が認められる。また、側面には研磨痕が認められる。伴出土器の年代から大洞A'式期のガラス玉と報告されている（青森県教育委員会 1974 PL17上）。このガラス玉については蛍光X線による成分分析が実施されており、カリガラス製で銅を着色物質としていることが判明している（小笠原ほか 1997・串村ほか 2017）。

銅着色のカリガラスは弥生時代中期中葉に近畿周辺や瀬戸内で出土し、中期後葉頃から流通する（肥塚ほか 2010・串村ほか前掲）。ガラス玉が出土したS地点II層は縄文時代前期～晩期および弥生時代前期の遺物が出土しており、縄文時代晩期末葉に遡る可能性はあるものの、串村ほかも指摘するように砂沢式期以降に下る可能性も十分に考えられる。

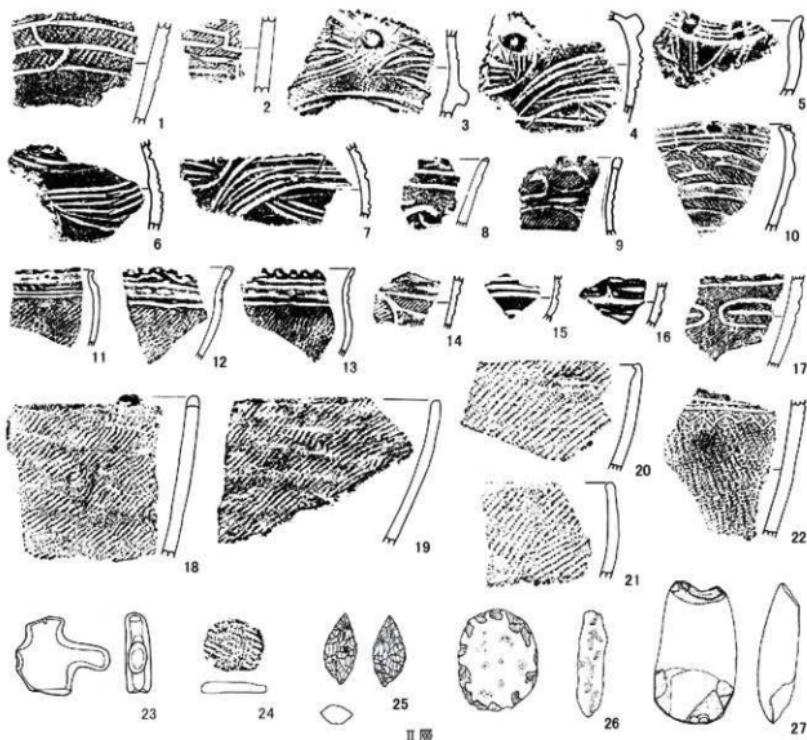


図 4-38 青森県教育委員会 N 地点出土遺物 (1)

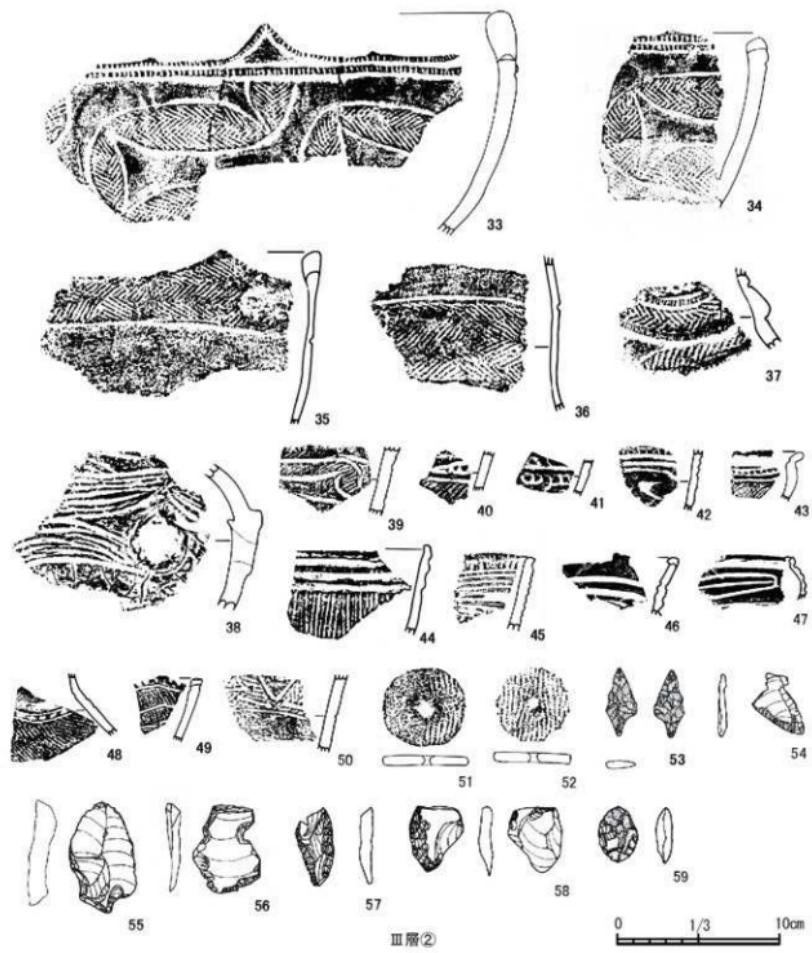


図 4-39 青森県教育委員会 N 地点出土遺物 (2)

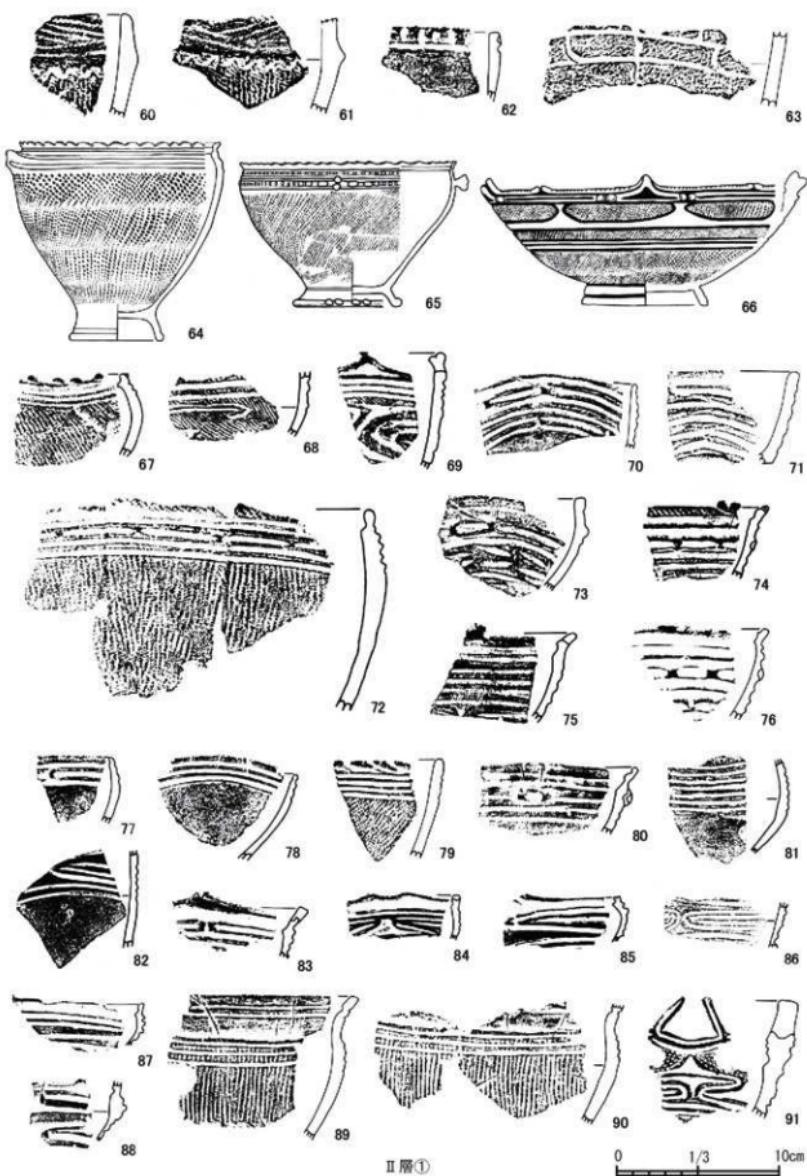


図 4-40 青森県教育委員会 S 地点出土遺物 (1)

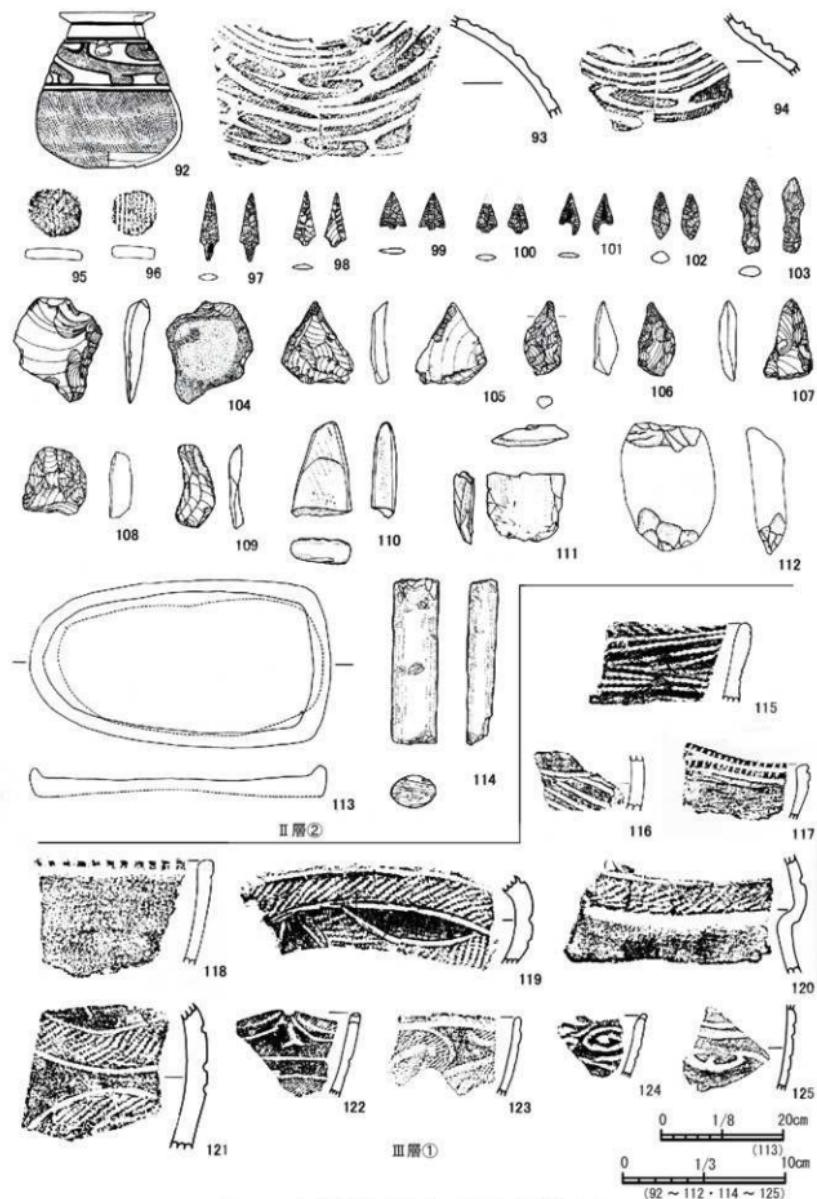


図 4-41 青森県教育委員会 S 地点出土遺物 (2)

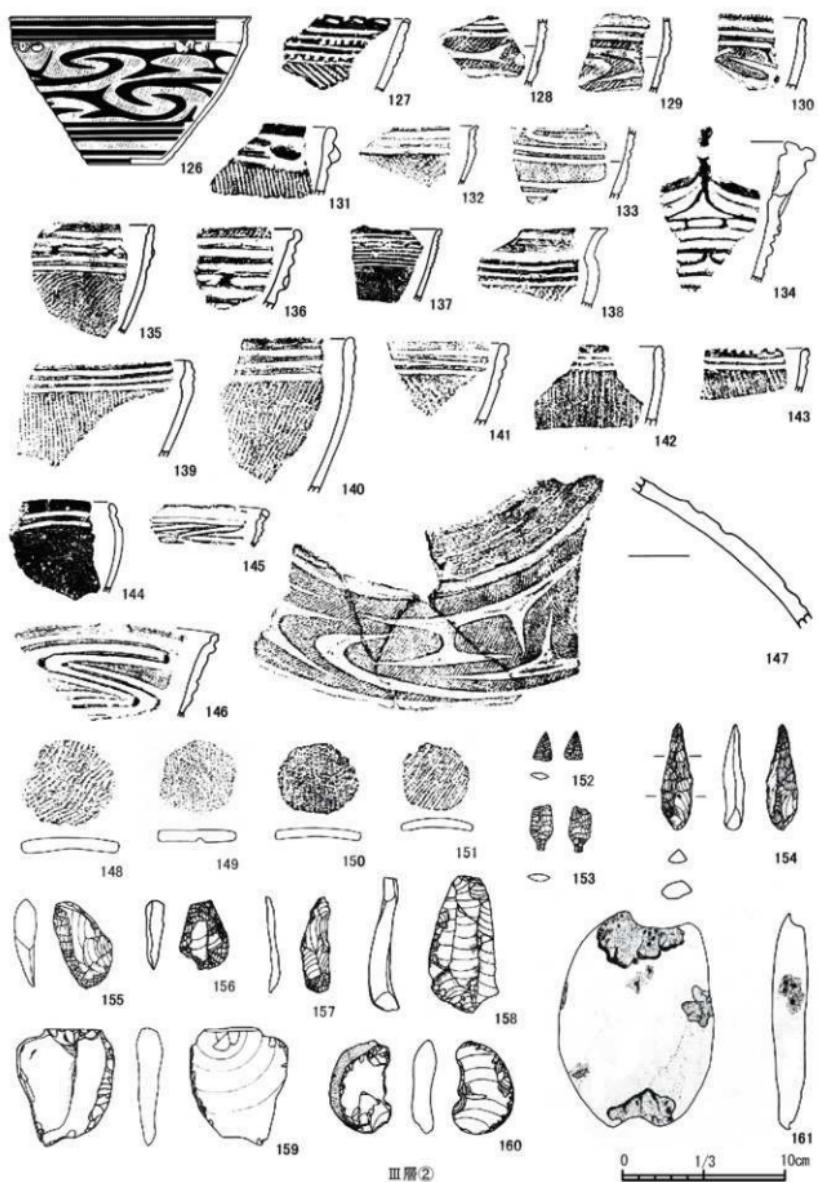


図 4-42 青森県教育委員会 S 地点出土遺物 (3)

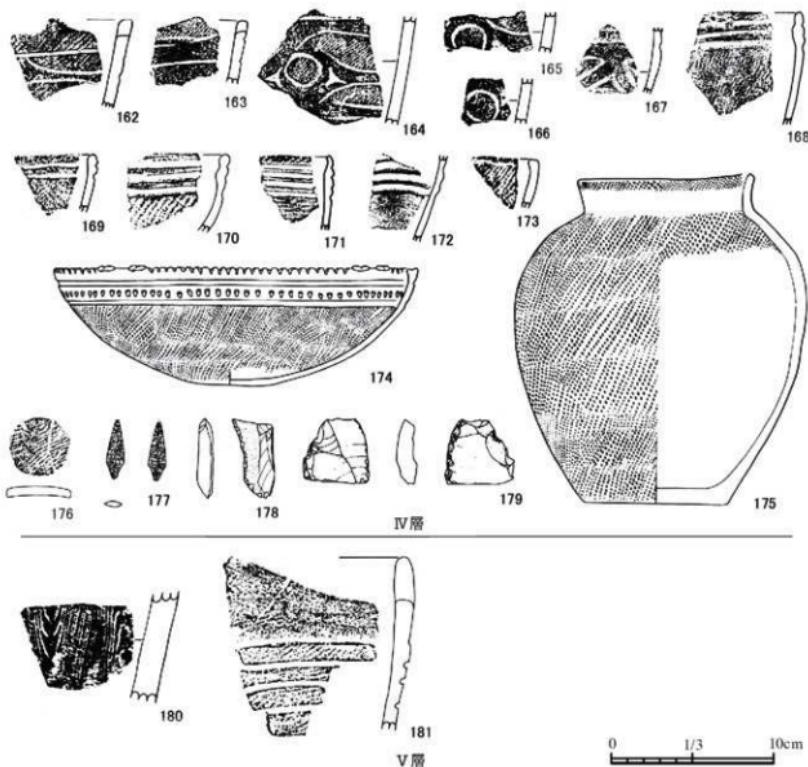


図 4-43 青森県教育委員会 S 地点出土遺物 (4)

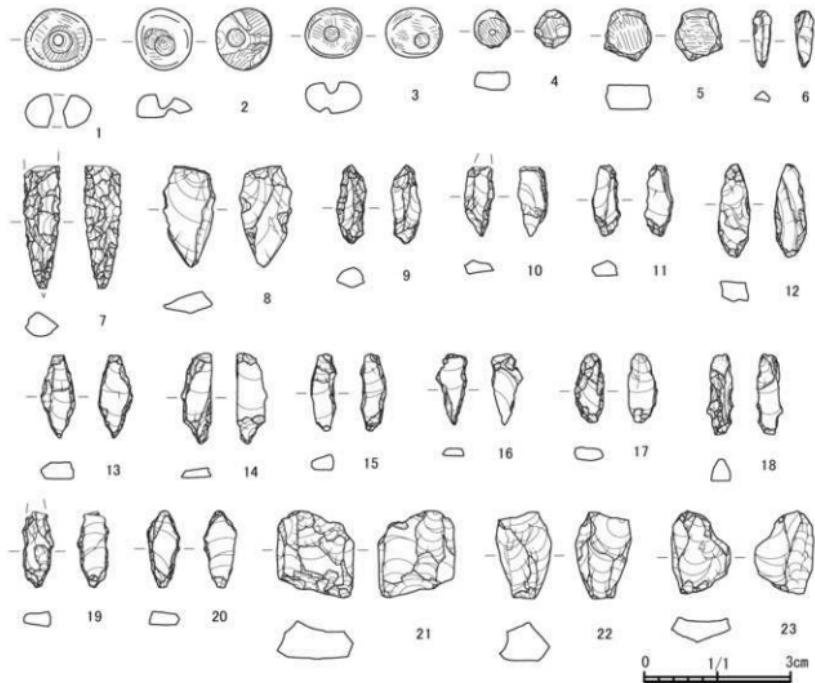


図 4-44 青森県教育委員会 N・S 地点出土玉類製作関連遺物

表 4-1 青森県教育委員会 N・S 地点出土玉類製作関連遺物観察表

図版番号	種別	器種	部位・形状	出土位置	出土層位	年代	石材	備考
図4-44-1	石製品	玉	完形	SA-1	II層	縄文晩期	緑色珪質凝灰岩	
図4-44-2	石製品	玉未成品	—	SA-1	I層	縄文晩期	緑色珪質凝灰岩	
図4-44-3	石製品	玉未成品	—	SA-1	II層	縄文晩期	緑色珪質凝灰岩	
図4-44-4	石製品	玉未成品	—	SB-1	II層	縄文晩期	緑色珪質凝灰岩	
図4-44-5	石製品	玉未成品	—	SB-1	II層	縄文晩期	緑色珪質凝灰岩	
図4-44-6	石器	石椎	完形	NA-5	II層	縄文晩期	メノウ	先端部磨滅
図4-44-7	石器	石椎	基部欠損	NA-5	II層	縄文晩期	メノウ	
図4-44-8	石器	石椎	完形	NA-5	II層	縄文晩期	玉髓	
図4-44-9	石器	石椎	完形	SD-2	II層	縄文晩期	珪質頁岩	
図4-44-10	石器	石椎	基部欠損	SD-5	II層	縄文晩期	玉髓	先端部磨滅
図4-44-11	石器	石椎	完形	SA-6	III層	縄文晩期	玉髓	
図4-44-12	石器	石椎	完形	SB-1	III層	縄文晩期	玉髓	
図4-44-13	石器	石椎	完形	SB-3	III層	縄文晩期	玉髓	被熱
図4-44-14	石器	石椎	完形	SB-3	III層	縄文晩期	玉髓	先端部磨滅
図4-44-15	石器	石椎	完形	SB-3	III層	縄文晩期	玉髓	
図4-44-16	石器	石椎	完形	SD-3	III層	縄文晩期	メノウ	
図4-44-17	石器	石椎	完形	SB-14	IV層	縄文晩期	玉髓	
図4-44-18	石器	石椎	完形	SB-14	IV層	縄文晩期	玉髓	
図4-44-19	石器	石椎	基部欠損	SB-14	IV層	縄文晩期	玉髓	
図4-44-20	石器	石椎	完形	SC-14	IV層	縄文晩期	玉髓	
図4-44-21	石器	楔形石器	—	NA-5	II層	縄文晩期	珪質頁岩	
図4-44-22	石器	両側刃端部ある剣片	—	NA-2	III層	縄文晩期	玉髓	
図4-44-23	石器	両側刃端部ある剣片	—	SD-2	II層	縄文晩期	メノウ	

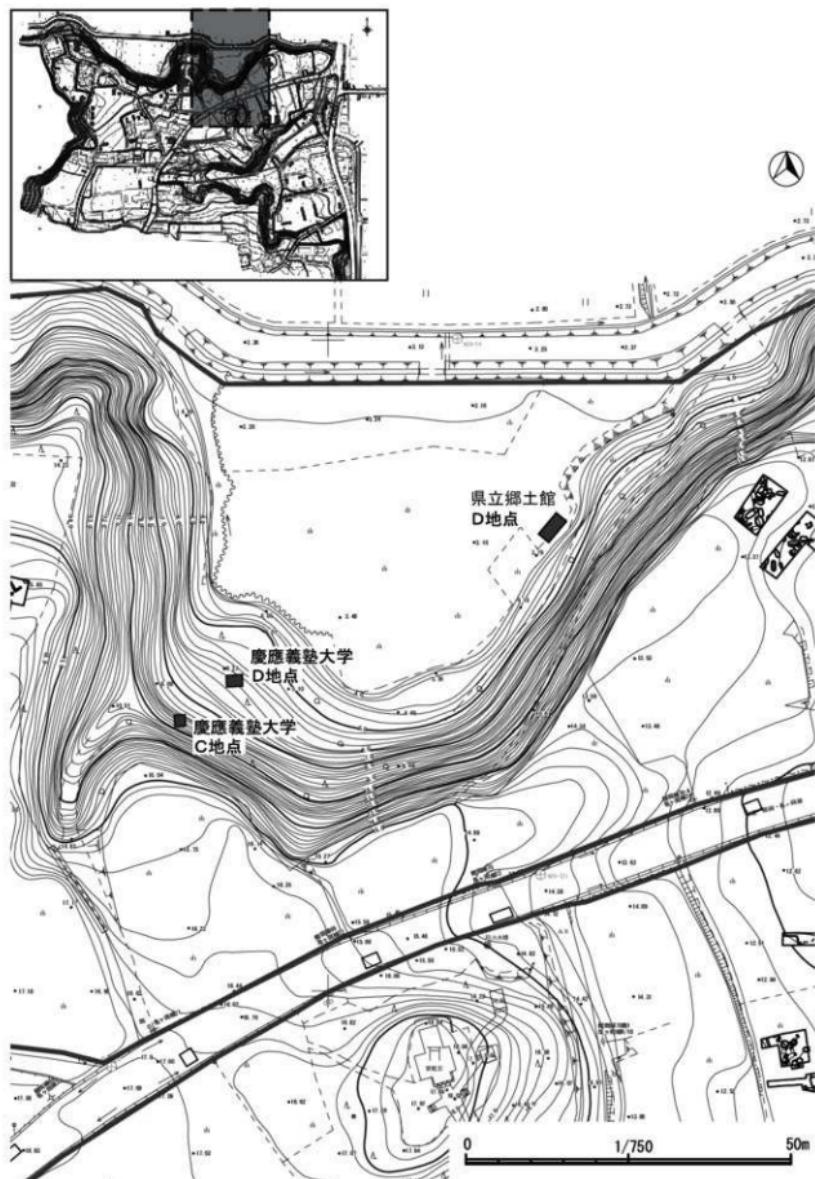


図 4-45 近江野沢低湿地調査区位置図

第3節 近江野沢低湿地の調査

近江野沢低湿地は、明治 17 年に蓑虫山人により発掘されたと推定される地点であり、明治 29 年の佐藤傳蔵の発掘調査により、完形土器や土偶など各種遺物が多数出土したことが報告された。佐藤の調査以降、亀山丘陵から沢根低湿地に向かう斜面部の部分的調査が慶應義塾大学や青森県立郷土館により実施された（図 4-45）。その結果、縄文時代晩期の遺物包含層の下には、無遺物層を挟んで後期の遺物包含層が確認された。

1. 慶應義塾大学による調査(C・D 地点)

発掘調査の方法と経過

慶應義塾大学により近江野沢低湿地に設定された調査地点は、C 地点と D 地点の 2 か所である。

C 地点は雷電宮北側、谷地形が丘陵地に滴入している低湿地内で、丘陵の崖面から続く緩斜面に 2 m 四方の小試掘坑として設定された。この周辺では、明治 29 年に佐藤傳蔵が発掘調査を実施している（第 2 章第 4 節）。遺物包含層は、遺物を含まない青色の砂層を挟んで 2 層確認された。上層からは縄文晩期の土器が出土した一方で、下層からは縄文時代後期の土器片が出土している。地表下 3 m に達したところで周囲の地盤が緩み出し崩壊が始まったため、掘削を中止した。

D 地点は、C 地点から北東～10m の位置に 3 m 四方の試掘坑として設定された。C 地点と隣接するにもかかわらず、それとは層序が大きく異なっていた。また、C 地点の遺物包含層が約 60 cm の厚さであった一方で、D 地点の遺物包含層は地表下 42 cm に始まり、1.7 m の厚さにおよんでいる。出土した土器は縄文時代晩期のみであった。

【C 地点の発掘調査概要】

(1) 層序

盛土と思われる厚さ 15 cm の表土下に厚さ 30 cm の灰色粘土層があり、次いで遺物包含層である厚さ約 70 cm の灰黒色粘土層が現れ、縄文時代晩期の土器が出土した。その下には遺物を含まない青色砂層が約 40 cm 堆積していたが、さらに掘り下げたところ約 20 cm の黒色粘土層、約 30 cm の青色砂混じりの黒色シルト層、35 cm の褐色砂層が上から順に確認された。この 3 層からは縄文時代後期の土器片が多量に出土しており、上下 2 層の文化層が明瞭に観察できた。さらに下には 15 cm の泥炭層、10 cm の灰色粘土層、40 cm の青色砂層が順に堆積しており、最終的に地表下 3m の地点で再び泥炭層が確認されている。

(2) 遺物（図 4-46）

土器

C 地点では、上層と下層で異なる時期の土器群が出土している。

上層出土土器は 1 点を除き全て縄文時代晩期前葉～後葉の土器であり、大洞 C1・C2 式期の土器群を主体とする。復元が可能であったものは皿 3 点、注口土器 1 点である。その他皿の小破片が多く出土しており、雲形文が施された破片、丹漆塗と黒漆塗が施された破片も確認された。また、丹漆塗壺が少なくとも 5 点確認され、精製土器の割合が著しく高かった。1・2 は晩期前葉の深鉢で、口縁部に弧線文や三叉文が施される。3～9 は晩期中葉～後葉の深鉢・鉢である。3 は口端部に刻みを有し、口縁部に平行沈線間の刺突列がめぐる。4～8 は口縁あるいは口頭部に平行沈線が施される。8 は口縁に A 突起を有する。9 は口縁から脣部にかけて工字文が施される。10～13 は晩期中葉頃の浅鉢である。10～12 は口縁にかけて肥厚し、口唇部に刻みや弧線が施される。口縁部から脣部下半にかけて C 字文が施され、三叉文や弧線文が付加されて雲形文が展開する。13 は口縁から底部に

かけて、磨消繩文手法による X 字文が施文される。

下層出土土器は後期中葉～後葉頃の土器群である。厚さ 1 cm 程と厚手で、黄褐色あるいは黒褐色を呈し、胎土に粗い砂粒を多く含む。18 は大ぶりの波状口縁を有し、口縁部の外湾する十腰内 II 群の深鉢である。口縁部には磨消繩文手法によるクランク文が施文される。口縁から胴部にかけて斜行繩文のみ施された深鉢もあるが、22～24 のように粗い羽状繩文を施したものが多い。



図 4-46 廣應義塾大学 C 地点出土遺物

石器

報告書中の遺物観察表から判断する限り、近江野沢低湿地から出土しているのは C 地点の石匙 (16)・敲石 (17) 各 1 点のみである。

【D 地点の発掘調査概要】

(1) 層序

厚さ 35 cm のやや厚い表土の下に、上から順に 7 cm の第 1 砂層、5 cm の泥炭層、7 cm の黒色第 2 砂層、20 cm の第 2 泥炭層、12 cm の青色第 3 砂層、7 cm の第 3 泥炭層、12 cm の灰色粘土層、10 cm の青色第 4 砂層、9 cm の灰色粘土層、45 cm の第 4 泥炭層の 10 層が堆積している。この第 4 泥炭層までは縄文時代晩期の土器片を包含している。さらに下では 10 cm の第 5 青色砂層、30 cm の第 5 泥炭層が確認され、地表下 2 m を過ぎたあたりで基盤の第 6 青色砂層に達している。このように D 地点では砂と粘土の薄層が多く確認され、他の調査地点とは大きく異なる層序であった。

(2) 遺物 (図 4-47)

土器

D 地点では複雑な層序が観察されたが、層位による土器の変化は捉えられなかった。また、C 地点と至近距離ではあるが、後期の土器は出土していない。出土土器は、粗製の壺 (15) とミニチュア土器 (16) がそれぞれ完形で 1 点出土した以外は小破片であった。2 ~ 13 は大洞 C1・C2 式期の鉢・深鉢である。口頸部に平行沈線や沈線間の刻み目が施され、胴部には磨消繩文手法による雲形文等が施文される。口頸部と胴部の境に 2 個 1 対の突起が貼付されるものもある。この他、第 3 層からは工字文が施文された大洞 A 式期の台部破片が 1 点、第 4 層からは羊齒状文が施文された大洞 BC 式期の破片 (1) が 1 点出土している。

石製品

緑色珪質凝灰岩製の玉類が 1 点出土した (17)。最大径が 2.1 cm と大型の玉で、穿孔は片面からのみである。

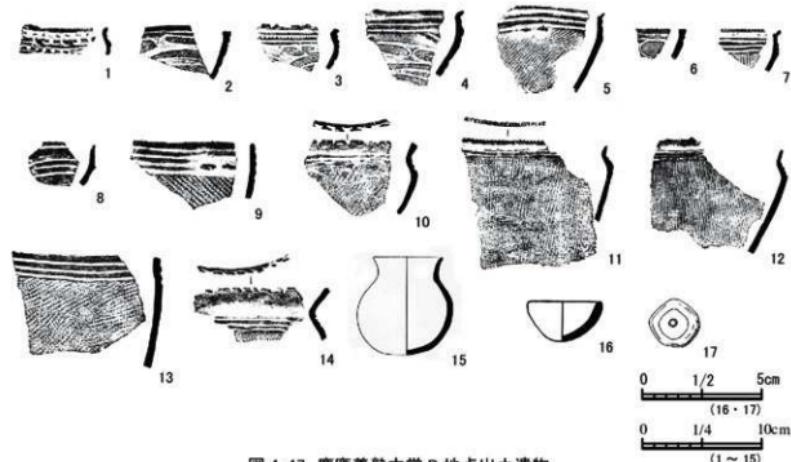


図 4-47 慶應義塾大学 D 地点出土遺物

2. 青森県立郷土館による調査

(1)概要

青森県立郷土館による近江野沢地区の調査は、昭和 56 年の第 2 次調査において実施された。長さ 6 m、幅 1 m のトレーナーを設定したが、湧水が激しく、深さ 50 cm ほどで発掘は中止された。

(2)地形・層序

調査地点は龜山丘陵の崖下に位置し、調査前にすでに水が湧き出している状態であった。発掘は表土（I 層）および II 層の一部まで中止している。なお、調査地点は搅乱を受けていたため、土層断面図の作成は行われていない。

(3)遺物(図 4-48)

土器

出土土器は、縄文時代晩期中葉～後葉の大洞 C2・A 式期を主体とする。その他、前期末葉の円筒下層 d1 式（1）や晩期前葉～中葉の大洞 B～C1 式期（2～4）、晩期末葉の大洞 A' 式期（19～21）の土器も小量出土した。

1～34 は鉢ないし深鉢である。2 は胴部に入組文、3 は口縁部に羊歯状文が施文される。4 は口縁部の平行沈線に刺突列がめぐる。5 は口縁直下に刻み目帯がめぐり、胴部に磨消縄文手法による曲線文が施文される。6 は胴部に連繫入組文の施文された聖山 I 式の鉢である。7・8 は口縁部と胴部の境に 2 個 1 対の突起が貼付される。9・10 は結節沈線と工字文が施文される。11～15 は結節沈線と四字文が施文される。18 は胴部上半に横位連続工字文の施文された聖山 II 式の鉢である。19～21 は変形工字文が施文され、21 には刺突文が充填される。22～24 は押し曳きと刺突による結節沈線が施される。32～34 は口縁から胴部にかけて斜位ないし縦位の条痕が施される。35 は肩部に楕円文の施文された壺である。36 は皿の底部破片である。

石器

スクレイバー・磨石・凹石・砥石・黒曜石製の剥片等が出土した（青森県立郷土館 1984 PL43）。
石製品

玉関係資料として、玉の未成品 1 点とその原石 3 点が出土した。玉の未成品は緑色珪質凝灰岩製で、その両面を研磨して平坦面を作出している（青森県立郷土館 1984 PL43）。

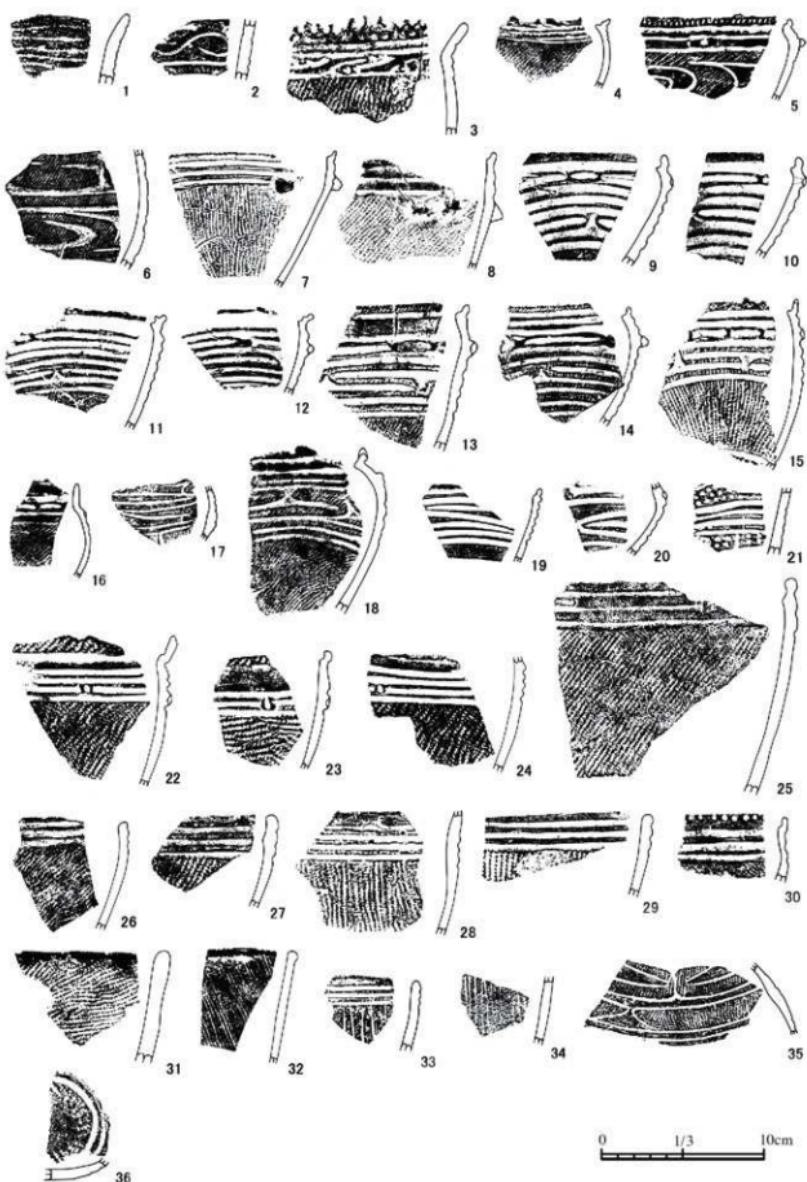


図 4-48 青森県立郷土館 近江野沢地区出土遺物